各学校における

教育課程編成への指針

ゆたかな学びにむけて

愛知県教員組合

「各学校における教育課程編成への指針～ゆたかな学びにむけて～」発刊にあたって

愛知県教員組合執行委員長
齋　藤　嘉　隆

教育研究活動は，子どもの幸せを願う愛教組運動の根幹です。愛教組発足以来，組合員の努力によってすすめられてきた実践研究の積み上げは，わたくしたちの宝です。教育研究活動は，望ましい教育課程の追究だけでなく，学校と地域とのつながりを密にしたり，学校に対する社会の信頼を深めたりする役割を果たしてきたものと確信しています。

教育は，子どもたちの実態に即し，地域の特色に根ざしたものであることが必要です。スタートもめざすべき目標も本来は，子ども一人ひとりの実態や思いに応じたものであるべきです。料理のレシピは「茹で時間何分，塩何グラム…」と調理の手順を示したものですが，マニュアルどおりの手順ですすめてもできあがりは千差万別・個性豊かです。つくり手のさじ加減，火の強さ，調理器具などによってできあがりはさらに大きく違ってきます。さらに素材やつくり手の思いによっても違ってくるはずです。学習指導要領によって，画一的な教育をすすめようとしても，結局はその場その場での子どもの気付きや学習環境，教員の力量，経験，アイディアなどによるところが大きいのです。教育課程編成もしかりです。そして，組合員がそうした実践の成果をもちより，交流し，自らの教育課程編成に生かす場が教育研究集会であると考えています。

「今日の授業はよくわかった」「学校は毎日楽しくて仕方ない」

こんな子どもたちの言葉が，学校教育や教員への信頼を高めることにつながると思います。愛教組は「わかる授業・楽しい学校」の実現をめざし，教育課程研究委員会と分科会教研推進委員会を中心に，新しい教育課程の創造にむけて研究を続けてきました。この「各学校における教育課程編成の指針～ゆたかな学びにむけて～」はその成果をもとに作成したものです。作成にあたり，ご尽力いただいた委員をはじめ多くの方々に感謝の意を表したいと思います。そして，「各学校における教育課程編成の指針～ゆたかな学びにむけて～」が，新しい教育のあり方を追究する一助となることを期待しています。

「各学校における教育課程編成への指針～ゆたかな学びにむけて～」作成にあたって

○　はじめに

この「各学校における教育課程編成への指針～ゆたかな学びにむけて～」は，教育課程研究部長会で論議のもと発刊が提起されました。新学習指導要領を大綱的基準としてとらえ，新しい教育課程を見据えた実践が重ねられ，その成果の一部をまとめたものが本書です。

愛教組は，これまでも学校現場に根ざした主体的・創造的な教育課程編成活動をすすめてきました。1988年～「学校５日制の実施を見据えた教育課程編成」，1997年～「各教科で総合学習を指向した教育課程編成」と学習指導要領が改訂されるたびに，教育課程編成への指針を発刊し，望ましい教育課程のモデル案を発信してきました。

新学習指導要領では「生きる力」は引き続き大切であるとしながらも，単に「学力向上」と称して知識・技能の獲得のための授業時数・学習内容の量的な増加をさせています。このことは，ますます子どもたちの「ゆとり」を奪うことにもなり，「ゆたかな学び」となる課題追究型の学習は展開しにくい状況となってしまいます。

こうした課題を解決していくために，子どもたちにゆとりとふれあいを保障する教育課程編成をしていくことは今後ますます重要になってきます。この「各学校における教育課程編成への指針～ゆたかな学びにむけて～」を参考に，子どもたちや地域の実態に根ざし，創意工夫をこらした学校独自の教育課程が編成されることが望まれます。

○　本書の構成について

―めざす「ゆたかな学び」とは―

ゆとりとふれあいの中で，必要な言語や表現，公式や定理，技能など「どの子にも必要な学力（基礎・基本）」を身につけること，一人ひとりの子どもが，学び方を学び，学んだことを日常生活に活用していけるような「その子にとって必要な学力（生きる力）」を学校・家庭のみならず地域社会において伸ばしていくこと

・「基礎・基本」について

各分科会における「今の子どもたちに必要な力とは何か」「その後の発展した学びにつながる力とは何か」といった観点から，各教科・領域の「基礎・基本」を示しています。

・「生きる力」を伸ばすための重点

今までに得た知識や体験をもとに，自分で課題を見つけ，自ら学び，判断し，行動し，よりよく問題を解決するなど，学ぶ意欲や表現力まで含めた総合的な力を育てていくための重点を示しています。

・「実践例」

ねらいをもとに，小学校・中学校の特色ある実践を紹介しました。多くの組合員に参考にしていただけるようできるだけビジュアルなものになるように心がけました。細かな内容までは掲載してありませんが，各学校の実践の参考となればと考えます。

・実践例における「ゆたかな学び」のポイント

実践例における「基礎・基本」「生きる力」を関連させて，子どもたちにとって「ゆたかな学び」となる教育課程編成のポイントを示しています。

（愛知県教員組合 教育部）

もくじ

国語教育……小学校……1
外国語教育……中学校……3
社会科教育……小学校……5
数学教育……小学校・中学校……7
理科教育（物理・化学，生物・地学） 中学校……11
生活科教育……小学校……15
美術教育……小学校……17
音楽教育……小学校……19
技術教育……中学校……21
家庭科教育……小学校・中学校……23
保健体育（保健・体育）……小学校……27
自治的諸活動と生活指導……小学校・中学校……31
障害児教育……小学校・中学校……35
環境問題と教育……小学校……39
情報化社会の教育……小学校・中学校……41
読書・学校図書館……小学校・中学校……45
総合学習……小学校・中学校……49

国語教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　「基礎・基本」について

国語教育では，４つの領域それぞれの学習を通して子どもの言葉の力を育成していく。「読むこと」の学習の中で，想像力を育むとともに，言葉が文脈の中でどのように遣われているのかを学習する中で，考える基礎となる語彙力を身につける。それを活かし「書くこと」「話すこと・聞くこと」などの学習で，自分の思いの基本的な発信の仕方を身につけさせていきたい。

○　「生きる力」を伸ばすための重点

子どもたちが言葉の学習をするときには，その内容が子どもたちの生活と密接に関係していることが大切である。だからこそ，子どもたちはその学習に必要性を見出し，自分の中の課題をもち，身につけた言葉の力を活用して解決していこうとするからである。そこで，教材と実社会や実生活とのかかわりに重点を置きながら学習をすすめていく。

実践例『古典に親しむ子どもの育成』

ねらい：「短歌や俳句」という単元を構成し，短歌と俳句を繰り返し音読させ，五音と七音のリズムを味わわさせたり，情景を思い浮かべる観点を提示したりするなどの学習活動を展開していくことで，描かれた情景を思い浮かべながら読むことができるようにする。そして，学習したことを活用して，短歌・俳句を創作することで，古典に親しむ子どもを育成したい。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

日本語には，五音と七音の組み合わせでできた詩歌が，伝統的な文化として数多く存在する。それらは，童謡や標語などの形で，無意識のうちに現代の子どもにも受け継がれている。子どもたちが，五音と七音の組み合わせでできた詩歌のもととなった「短歌と俳句」について学習する中で，語彙力を育むとともに，自分の生活を振り返りながら，古典に親しむことを「ゆたかな学び」のポイントとした。

知る段階（短歌と俳句の特徴）（１時間）

・短歌・俳句について，音数に制限があることや季語を用いるなどのきまりがあることを説明する。また，教員の範読により，五音と七音で区切って読むことを理解させる。そして，教員の後に続いて読ませたり，五音と七音で読む人を変えながら読ませたりする。
・子どもたちは，五音と七音のリズムをつかむことができるとともに，大きな声で音読することができる。

読み味わう段階（短歌と俳句の鑑賞）（３時間）

①情景を思い浮かべる観点を知る。

「スケートの　ひも結ぶ間も　はやりつつ」という俳句についての鑑賞文（資料①）によって，情景を思い浮かべるための観点を学習する。鑑賞文にサイドラインが引いてある言葉は，どんな観点で書かれたものかについて考える。「『楽しそうな笑い声』という言葉は，『聞こえること』だね」など，考えたことを発表し合い，７つの観点（「季節や時間」「場所」「聞こえる音や声」「目に見えるもの」「肌で感じるもの」「辺りのにおい」「作者の気持ち」）で俳句を鑑賞したらよいことを理解することができる。

【資料①：配布した鑑賞文】

②自分が選んだ俳句の情景を思い浮かべる。

ア　観点ごとに思い浮かべる。

・　まず，「柿食へば（略）」「古池や（略）」など，子どもが聞いたことがある句や，家族をテーマにした句など，教員が選んだ９編の俳句から，気に入った句を一つ選び，ワークシートに書く。

【情景を付せんに書く様子】

・　次に，選んだ俳句を読んで思い浮かべた情景を付せんに書いて，ワークシートの周りに貼る。子どもたちは，一つの観点だけでなく，付せんの枚数を増やそうと，さらに違う観点でも読み取ろうとし，いくつもの観点で思い浮かべた言葉を付せんに書くことができる。

イ　思い浮かべたことを絵と言葉で書き表す。

・　付せんに書いた言葉をつないで鑑賞文を書く。子どもたちは，例えば，「妹を　泣かして上がる　絵双六」という句から，「今日はお正月，家の中でこたつの中。あたたかい空気が足に当たる。（以下略）」（＿＿部は付せんに書いた言葉）という文章を書き，兄に双六で負け悔し泣きする妹の様子を思い浮かべることができる。

活用する段階（短歌と俳句の創作）（２時間）

①夏らしいと感じる場面を見つける。

夏らしいと感じる場面を見つけようとする中で，「じわじわと虫の鳴き声」（聞こえてくるもの），「ひんやり」（肌で感じるもの）など，五感で感じてその様子を書き表すことができる。

②創作する。

先に書いた夏らしいと感じる場面の中から，俳句に使いたい言葉を選ぶ。子どもたちは，選んだ言葉をさまざまな順序で並び変えたり，削ったり，つけ足したりしながら，自分の思いを的確に表現できる言葉を吟味し，一つの句をつくることができる。

外国語教育

中学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

外国語科は，言語の習得だけではなく，視野を広げ異文化を理解し，尊重する態度の育成をはかる学習である。そこで，互いの思いや考えを伝え合うために必要な「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などの「コミュニケーション能力の基礎」を身につけさせていきたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

「自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」を身につけるだけでなく，「仲間とのかかわり合いを通し，互いのよさを認め合い，高め合う」活動にも重点を置きながら外国語学習をすすめていく。

実践例『Dear My Friend』

ねらい：一般動詞の三人称単数現在形の形や用法を理解し，クラスメイトについての紹介文を書いたり話したりすることに意欲的に取り組むことができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　1年生

中学校１年生において，クラスメイトについての紹介文づくり・発表を，友だちとのかかわり合いを通して，学習をすすめていった。

「わかった」「できた」という達成感を味わわせるために，友だちとかかわり合い，考えを練り合いながら，学習を深めることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

一般動詞の三人称単数現在形の用法を理解しよう
（１～５時）

①モデル文から，一般動詞の三人称単数現在形の形や用法の違いを発見する。
②ペアによるドリル練習や教科書の英文暗唱などを通して，一般動詞の三人称単数現在形の用法を理解する。

【自作ドリルで練習の様子】

(教員の「Start！」に続いて)
He likes music.　He plays the guitar.　…

１学期，英語で自己紹介したり，相手のことを尋ねたりすることができた子どもたちが，クラスメイトのことを紹介したり尋ねたりする時に使う「一般動詞の三人称単数現在形」に気付き，身につけることができる。

グループでクラスメイトの紹介文をつくろう（6～7時）

①あるクラスメイトの持ち物になりきらせ，その視点から見たクラスメイトの紹介文をつくる。
・グループで教え合う。
・辞書やインターネットで調べる。
②プレゼンテーション用原稿をつくる。

「彼はサッカーが好き」だから，He like soccer…あっ！He likes だよ。

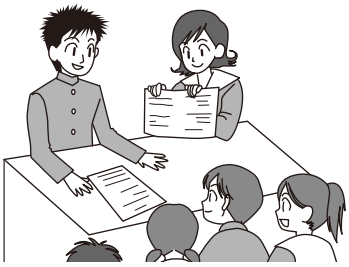
子どもたちは，学習した「一般動詞の三人称単数現在形」を使って，クラスメイトの紹介文をつくることができる。また，グループ内で，調べる・組み立てる・書きとめるなどの役割分担が協力的に行われ，どの子どもたちも意欲的に取り組むことができる。

あった。この表現使えそう！

クラスメイトの紹介文を発表しよう（8～9時）

①発表のために，自分たちでつくった紹介文を暗唱する。
②グループでリハーサルを行う。
③クラスメイトの紹介文をクラス全体の前で発表する。

He uses me every day. He doesn't like math, but he studies hard. He likes music. Sometimes he doesn't study, so I'm sad. Who's he?



子どもたちは，学習した「一般動詞の三人称単数現在形」を使って，クラスメイトの紹介文を発表し，友だちとともに「できた」「わかった」という達成感を味わうことができる。このことは，他者を理解し，互いのよさを認め合う態度を育てる上で重要であると考える。

社会科教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

社会科を通して身につけたい基礎・基本とは，社会生活を主体的・創造的に営むために必要な知識と社会に対する見方・考え方，知識や見方・考え方を獲得する過程で必要となる能力（観察する力，調査する力，資料を活用する力，調べたことや考えたことを表現する力），学習で身につけたことを自らの学び方や生き方に反映していく社会的態度である。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

社会科は，社会の中での生き方を育てる上で中核的な役割を担ってきた教科である。さまざまな課題が山積する現在の社会の中での生き方を育てるためには，子どもの主体性と創造性を一層重視する必要がある。そこで，自ら問題を解決して知識や社会に対する見方・考え方を確実に獲得できる学習や，獲得した知識や社会に対する見方・考え方をもとにして社会の抱える課題の解決策やよりよい社会のあり方を吟味・検討することができるような学習を行うようにする。

実践例『チャレンジ！ごみダイエット大作戦！』
ーごみと住みよいくらしー

ねらい：小学校４年生においてごみを題材に取り上げ，ごみのゆくえを調べることによってさまざまな問題点を見つけ，その解決策を考えることができるようにする。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　4年生

ごみ減量化にむけた地域や人々の営みを紹介することで，人々の願いや思いに共感できるようにしていく。そして，よりよい社会を形成するために，自分ができることを考え，行動しようとする段階を本実践における「ゆたかな学び」のポイントとした。

ごみのゆくえに目をむける（１～３時）

①ごみのゆくえＭＡＰをつくる。
②ごみステーションを見学。

ごみがたくさん出るんだね。少しくさいよ。

ごみに携わる人の声に耳を傾ける（４～６時）

①お家の人にごみ出しで困ってることを聞いてみる。
②クリーンセンターを見学。

ものすごい空き缶の量だよ。何個ぐらいあるのかな？

ごみ問題を真剣に考えて取り組んでいる地域や人々の営みを調べる　（7～10時）

①徳島県上勝町のごみの分別と比べてみよう。
- どうして燃えるごみが少なくて，資源ごみが多いのか？
- 上勝町の工夫を追究する。

②愛知県内の小学校におけるごみの分別と蒲郡との違いを比べてみよう。
- 名古屋市のごみ問題を追究する。

ごみを34種類も分別するんだな。とっても細かく分別するんだね。

よりよい社会を形成する問題について自分の意見をもつ　（11～14時）

①蒲郡市にも「レジ袋有料化」を導入するべきか考える。
②ごみを減らすためには，どんな方法があるのか考える。
③「ぼくらのごみエコアイディア」を考えて実践する。
④ごみ宣言書をつくる。

レジ袋有料化には反対です。レジ袋は便利でよく使うから，お金をかけられると，みんな困ると思います。

レジ袋はごみ袋になるから便利だよね？なくなってもいいのかな？

レジ袋を有料にしないと，みんなどんどん無駄づかいすると思います。

数学教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

算数における「基礎・基本」とは，基礎的・基本的な知識・技能，および数学的な考え方の習得である。基礎的・基本的な知識・技能の定着や，これらを活用する学習活動において，既習内容を想起しそれらを活用して，新たな基礎・基本を身につけていくようにしたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

基礎・基本を身につけ，いかに社会が変化しようと，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力を身につける上で，算数・数学の果たす役割は大きい。そこで，問題を解決する資質や能力を身につけるために，子どもたちの学ぶ楽しさを味わわせ，主体的に取り組む態度をもたせながら学習をすすめていく。

実践例『九九をさがそう』

ねらい：日常生活や図から「九九を探すこと」を通して，かけ算を使うことのよさに気付き，ものの個数をとらえるときにすすんで用いようとする態度を養う。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　2年生

小学校２年生において，おまんじゅうの数を工夫して求める活動を通して，解決方法を互いに伝え合う活動をすすめていった。求め方が多様にある図を用いることで，自分とは違った考えに多くふれることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

九九はいろんなところにかくれているよ
みんなでさがしてみよう
（1時）

おまんじゅうの数をもとめよう。

・５こずつの６つ分だから
　５×６のかけ算で考えたよ。
・６こずつの５つ分でもできるね。

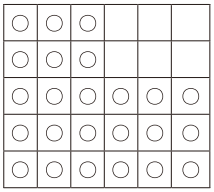
・数えたら，30こだったよ。
・たし算で，
　５＋５＋５＋５＋５＋５
　をやったよ。

かけ算のほうが速く数えられるね。

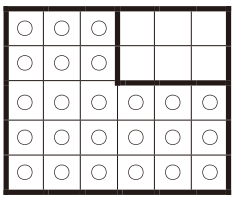
⇩

身の回りでも，かけ算でもとめられるものをさがしてみよう。

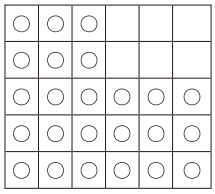
たいへんだ。だれかがおまんじゅうを食べちゃった
おまんじゅうの数を九九をつかって，工夫してもとめよう（2時）



・はじめのおまんじゅうの数は，５×６で30こだよ。
・ケースの数を九九で見つけたよ。
・食べたのは，２×３で６こだよ。



５×６＝30
２×３＝６
30－６＝24
答え　24こ
ひき算もできた。



・かけ算でもできるよ。
６×４＝24
・へえ。まとまりをつくれば１つの九九でできるね。

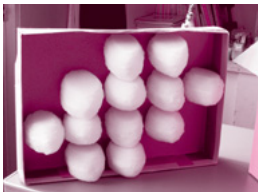
は・か・せだね。（はやい・かんたん・せいかく）

→ **一つの九九で数えてみたいな。**

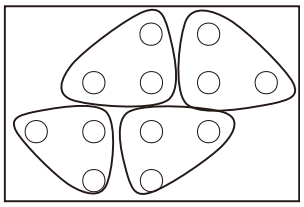
たまごの数を１つの九九になるように工夫してもとめよう（3時）

【ペア学習】

A：私の考えを説明します。
私は，３×４＝12で求めました。
B：たぶんこのようなまとまりをつくって考えたと思います。
A：ちょっと違います。ヒントを出します。
１つ分の形は，これです。
B：このように考えたのですか？
A：正解です。
B：Aさんの考えは，わたしが思いつかなかったのでいいと思いました。
A：ありがとうございます。



ペア学習では，全員が自分の考え方を相手に伝えることができる。また，友だちが考えた式から囲み方を見つけ，式を読むことができる。



・いろいろな考え方があるね。
・たくさん考え方が出たね。
・みんなで考えると楽しいな。
・もっとかけ算をみつけたいな。

数学教育

中学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　「基礎・基本」について

数学における「基礎・基本」とは，基礎的・基本的な計算の技能の習得である。そこで，基礎的・基本的な技能の定着をはかるための学習活動は，反復練習を通して身につけさせていきたい。

○　「生きる力」を伸ばすための重点

基礎・基本を身につけ，いかに社会が変化しようと，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力を身につける上で，数学の果たす役割は大きい。そこで，問題を解決する資質や能力を身につけるために，学ぶ意欲を子どもにもたせ，問題に意欲的に取り組むことができるようにしながら学習をすすめていく。

実践例『二次方程式』

ねらい：１つの問題に対して，いろいろな見方や考え方で解くことができることに気付き，関心をもつことができる。また，二次方程式を利用することのよさに気付くことができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　３年生

中学校３年生において，二次方程式を解くことを通して自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，よりよく問題を解決する学習課題を見つける学習活動をすすめていった。

提示問題を工夫し，いろいろな見方や考え方で解くことができる問題にすることで，多様な考え方からよりよい考え方を見つけることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

二次方程式とその解き方
（1～4時）

① $1+3+5+7+\cdots$のように，奇数を順番にたす。和が400になるのは，何番目になるか考える。
② $ax^2=b$，　$(x+m)^2=n$ の解き方を考える。
③ $x^2+px+q=0$ の解き方を考える。
④二次方程式の解の公式を考える。（発展）

いろいろな見方や考え方で解くことができることに関心をもち，その中から，数量の関係を式に表すと二次方程式になることに気付かせ，平方根の考えを使って，二次方程式を解くことができる。

二次方程式と因数分解
（5～6時）

①因数分解を利用して，二次方程式の解き方を考える。
②いろいろな二次方程式の解き方を考える。

因数分解を利用して，二次方程式を解くことができる。また，複雑な二次方程式は，$ax^2+bx+c=0$の形にして，解くことができる。

二次方程式の利用
（7～9時）

①１辺が１cmのタイルを階段状に並べてできる図形について，面積が55cm^{2}になるのは何段のときか求める。
②カレンダーの中で，上下の２数の積が176になっているところを求める。
③長さ40cmのひもで長方形をつくり，その面積が84cm^{2}になるようにしたときの長方形の縦と横の長さを求める。

二次方程式の利用の場面では，まず多様な考え方ができる問題を提示し，問題解決をさせた。第７時での問題は，階段状の図形において，面積が決められているときの階段の段数を求める問題であるが，考え方は多様にある。実際に階段状の図を何段もかいていき，その面積になるまでかき続ける子どももいたり，表をつくり，面積が階段の段数が増えるごとにどのくらい増えるのかという規則性に気付き，それから解決に導く子どももいたり，x段の面積を式で表し，二次方程式を利用して解決に導く子どももいたりした。授業の中では，まずは自力解決をさせて，それぞれの考え方を発表し，それぞれのよさについて話し合わせた。答えは，実際に階段状の図をかいたり，表をかいたりすることで，簡単に導き出すことができるので，どの子どもも自分からすすんで考えようとすることができた。その中で，面積の値に関係なく，一般的に解決できる二次方程式を利用する考え方のよさに多くの子どもが気付くことができた。また，二次方程式を利用した解決方法に気付かなかった子どもも，他の人の考え方の発表を聞くことによって，新たな発見をし，自分もその考え方で問題を解決してみようと意欲的に取り組むことができた。実際に図をかいたり，表を使って考えたりしていた子どもも，練習問題では，二次方程式を利用して解決していこうとする姿が多く見られた。

これらの実践を通して，はじめ子どもは問題を１つの考え方で解いたら終わりだったが，いろいろな考え方があるということ，その中には自分の考え方よりよいものがあるということがわかり，多様な考え方を見つけようとする子どもが増えてきたと考える。

理科教育（物理・化学）　中学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

理科学習においての基礎・基本とは，「問題解決の能力」「自然を愛する心情」「自然の事物・現象についての実感を伴った理解」「科学的な見方や考え方」の要素を，自然に親しみ，実験・観察を通して身につけることである。こうして築かれた基礎的・基本的な知識・技能は，実生活における活用や論理的な思考力の基盤として重要な意味をもつものであると考える。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

昨今，子どもたちをとりまく生活環境は大きく変化し，子どもが自然と深くかかわる体験をする機会が減少してきている。こうした子どもたちが身近な自然環境に目を向け，興味関心をもって学習に取り組み，すすんで課題追究が行えるよう教材や支援のあり方を工夫していくことを重点とした。

実践例『水溶液の性質』

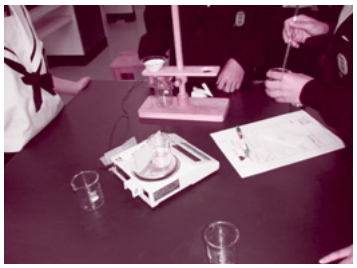
ねらい：課題に対して子どもの興味・関心を揺さぶり，結果の理解をしやすくすることで，新たな考えを導き出し，子ども一人ひとりの追究していく力を高めることができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　1年生

水溶液の性質を調べ，中和してできた塩の正体を判別する方法を考え実践する学習活動をすすめていった。理科学習として身近な素材や実験結果をわかりやすくする教具を用いることで，子どもたちの課題に対する好奇心を高めさせ，意欲的な追究活動を行わせることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

物質が水に溶けるとはどういうことか　（1～2時）

①物質が水にとけるとはどういうことか調べる。
②前時の実験をもとに物質が水に溶けるとはどういうことかをまとめる。



子どもからはさまざまな意見が出された。水に溶けた物質は無くなったのかどうかを調べたいという意見が出てきたため，実験を行った。実験の結果から，溶けた物質は水の中に存在することがわかり，子どもは水溶液の面白さを実感した。

水に溶けている物質はとり出せるか　（3時）

①水に溶かした食塩と硝酸カリウムを取り出す方法を考える。
②実験を行い物質を水から取り出す。
③結果をまとめ，考えを深める。

それぞれの考えた実験で追究させた。追究していくうちに，物質によって結晶の形が違い温度の変化で溶け方が変わるものと変わらないものがあることを発見すると，「すごい」「硝酸カリウムは冷やすと結晶がたくさん出てきた」など驚きの声をあげていた。子どもの感想には「実験がすごく楽しかった。小学校でも同じような実験をしたけど，小学校では気付かなかったことに気付けたのでよかったです」など自ら追究していくことで新たな発見をしていく姿が見られた。

酸性，アルカリ性とは何か　（4～5時）

①酸性，中性，アルカリ性の水溶液をリトマス紙，BTB溶液，紫キャベツ液，マグネシウム粉末で調べる。
②酸，アルカリについて実験結果をまとめ，共通点を考える。
③酸，アルカリをさまざまな方法で調べる。
④各水溶液の性質をまとめる。

酸性，アルカリ性とは何かについて追究させた。子どもに水溶液の性質について知っていることを発表させたところ，多くの意見が出された。その中から，水溶液の性質を調べるためにどのような方法があるかを考えさせたところ，いろいろな考えが出てきた。その中から，リトマス紙，BTB溶液，紫キャベツ液，マグネシウム粉末を用いて水溶液の性質を調べた。セルプレートを用いたことで，一目で水溶液の性質を理解することができた。子どもたちは，予想通りの結果になったりならなかったりしたことで，さらに追究したいと意欲をもつことができた。また，紫キャベツ液以外の身近なものを使って調べたいという意見も出てきた。

酸性とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせるとどうなるか　（6～8時）

①酸性，中性，アルカリ性の水溶液をリトマス紙，BTB溶液，紫キャベツ液，マグネシウム粉末で調べる。
②酸，アルカリについて実験結果をまとめ，共通点を考える。
③酸，アルカリをさまざまな方法で調べる。
④各水溶液の性質をまとめる。

塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を混ぜ合わせていくと，液の性質がどのようになるかを調べた。水酸化ナトリウム水溶液の量を多くしていくにつれ，子どもは，BTB溶液の色が黄色から緑色，青色に変化していくのを見て目を輝かせていた。そして，中性になった水溶液には何が溶けているのかを調べることにした。子どもは，第４～５時に調べた水溶液の判別方法を思い出し，自ら調べる方法を考えて，実験を行った。硝酸銀水溶液を使ったり，蒸発させたりするなど一人ひとりが実験方法を組み合わせていくことで，食塩ができていることをつきとめることができた。子どもたちは「実験をして何の物質かわかったときはとてもうれしかった」と新たに発見できた喜びを感じていた。

理科教育（生物・地学）　中学校

実践例『植物の生活と種類』

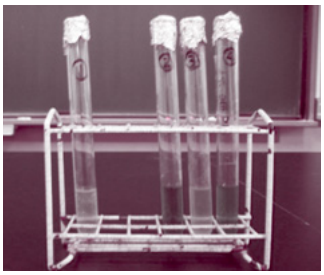
ねらい：本校の特色である国指定天然記念物に指定されているゲンジボタルのエサとなるカワニナ（巻き貝の一種）やホタル池にたくさん生えているオオカナダモ，校庭に生えている多数の植物を本単元『植物の生活と種類』で活用し，わかりやすく提示することで，理科好きな子どもを育成することができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　1年生

子どもが興味を示すような身近な教材を提示し，単元を通して個の学びを支える支援を的確に行うことにより，「教えたいこと」を「学びたいこと」へ転化し，理科好きの子どもを育てることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

気付き・意欲をもつ（1時）　①４本の試験管の色が違うのはなぜだろう。

写真１

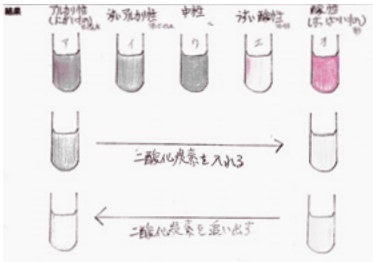


単元の導入で，本単元に興味をもたせるために，試験管を子ども一人ひとりに配り，石けん水，ＢＴＢ溶液を入れさせた。すると青色になり，多くの子どもが「きれい」「お～青になった」と興味深そうにつぶやいていた。その後子ども一人ひとり，ストローで試験管内にぶくぶくと泡が少し顔にかかりながら息を吹き込んだ。だんだんと黄色になっていき，多くの子どもの「不思議」「なんで黄色になったの？」と声が聞こえてきた。そこで，ＢＴＢ溶液を入れた謎の４本の試験管《①黄色②青色③黄色④緑色》を提示（写真１）し，「ヒントは①は石けん水に息を吹きこんだもの，②から④は①の試験管にオオカナダモをいれて，ライト，アルミホイル，カワニナを使うとなるよ。なぜ４本の試験管の色は違うのかな？」と投げかけた。すると，理科の授業があるたびに，ＡはＢと答えを確かめ合ったり，教員に答えを伝えにきたりしてきた。そのようにＡが行動したのは，カワニナなどを使った興味のある教材や課題であったからだと考える。

見通す　（2時）　①ＢＴＢ溶液の色はどうなったら変わるだろうか。

酸性は薄い酢，濃い酢を，中性は水を，アルカリ性は薄い石けん水，濃い石けん水を準備し，それぞれのグループ，一人一役となるように役割を指示し，ＢＴＢ溶液を加えさせた。すると，水溶液の薄い・濃いで色が若干異なることや，酸性，中性，アルカリ性ではまったく色が異なることに気付いた子どもが多かった。教科書では酸性は黄色，中性は緑色，アルカリ性は青色と学習する。しかし，５つの水溶液の色を学習シートに記入するように指示したところ，グループで色の違いを指摘しながら，Ａは酸性の色を黄色と橙色を混ぜた色で，アルカリ性を青色と緑色を混ぜた色で夢中に表現していた。また，色の薄さを色えんぴつで薄くぬって描くことができた（資料１）。その後，一人ひとりに試験管を配り，薄い石けん

水に息を吹き込ませ，青色から黄色にさせた。その試験管に沸騰石を入れ，ゆっくり加熱させた。すると，水溶液の色が黄色から青色に変わるのを見ることができた。そのとき周りからは「マジックみたい」という声があがった。そのなかでもゆっくり加熱した子どもからは，青色になる前に緑色になったことに気付いた子どももいた。Aは「まだまだ調べたいことがある。アルカリ性＋二酸化炭素のことはわかったが，酸性や中性の場合のこともやってみたい」と感想を書いた。このような感想が書けたのは，色の変化の不思議さに驚き，疑問をもったからだと考える。謎めいた教材，一人一実験が色えんぴつをぬる活動を意欲的にさせたと考える。



資料１

深める ⇔ 見直す（3～9時）

①光合成は葉のどこで行われているのだろうか。
②光合成が行われている葉の緑色の部分を見てみよう。
③光があると葉はどんな気体を吐き，吸うのだろうか。
④光がないと葉はどんな気体を吐き，吸うのだろうか。

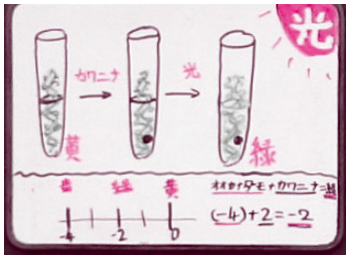
資料２

光合成は葉の緑色の部分と光が必要であることを一人一役割の実験を通して理解した後，「光合成が行われている葉の緑色の部分を見てみよう」と投げかけた。そして，「５分間同じ場所を見て，何か変化があったら教えて」と伝えた。すると，教室が静まりかえり１分後に「先生，葉緑体が動いた」と大きな声で伝えた子どもがいた。そうすると，次から次に「ぼくも」「わたしも」という声が聞こえてきた。葉緑体が動く様子を見てＡは感想で「葉緑体が動いた。可愛いです」と書いた。植物は動かないと思っていたＡが，顕微鏡をのぞいてみると葉緑体が動いていて驚いたからだと考える。その後，意欲的にスケッチしていった（資料２）。

広げる・極める（10～13時）

①４本の試験管の色が違うのはなぜかを解明しよう。
②葉は光合成をするためにどんな工夫をしているのか調べてみよう。

写真２



予想，実験，個での考察，グループでの考察，全体の場での考察，個での振り返りの流れを設定することで，多くの子どもに理解させたり，子どもの考えに深まりをもたせたりしたいと考えた。中でもグループでの考察では，意見交換をしやすいホワイトボードを用いた。ホワイトボードの使い方の約束は，①絵図でまとめること，②最初に自分の考えを述べ，全員が自分の考えを述べてから，班の話し合いを開始することとした。授業を重ねるたびにホワイトボードを使った話し合いやまとめ，発表が上手になってきた。「４本の試験管の色が違うのはなぜか」と投げかけたところ，AのグループはAを中心に写真２のようにホワイトボードへまとめた。そこで，数字でオオカナダモの光合成とカワニナの呼吸の割合を表現していたのでAに「この考え方，面白いね。ぜひ，みんなに教えてあげて」と話すと，Aは全体の場で堂々と発表できた。ホワイトボードの活用は，子どもの学習の深まりや意欲に一役買っていると考える。

生活科教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

生活科の基礎・基本の一つとして，自然や社会といった対象とかかわりながら，さまざまなことに気付き，その気付きを自分の生活や学習に生かすことで，「またやりたい」「できるようになった」など，生活や学習に対する意欲や自信獲得があげられる。体験活動で子どもが，自ら思いや願いをもって対象とかかわることで，驚いたり，不思議に思ったり，納得したりする。そのような心の動きから「対象への気付き」が生まれる。そして，対象への気付きを周りの人からその価値を認めてもらうような経験を積み重ねることで，子ども自身が「やればできる」と自分の成長を実感できるようになる。それが「自分自身への気付き」である。こうした自分自身への気付きが重なることで，生活や学習に対する意欲や自信が生まれてくると考える。以上の考えから，対象への気付きの質を高め，それが自分自身への気付きにつながるような学習を行いたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

生活科の学習では，子どもが主体的に活動して得られた気付きを，その後の活動や体験によって，さらに実りあるものとして広げ，深めることによって，明確な認識として成り立たせていくことに重きがおかれている。そのような学習を積み重ねることによって，子どもが生活や学習に対して一層意欲と自信をもって取り組むことができるようになる。これが，生活科で育てることのできる「生きる力」であると考える。本実践では，子どもが，活動を振り返る時に，新たに体験活動を行って得た対象への気付きとこれまでの活動での気付きを比べ，どのようなことがわかってきたのかを意識できるようにしていく。それにより，対象について新たな見方・考え方を生み出したり（気付きの広がり），これまでの見方や考え方を，より確かにしたり（気付きの深まり）することができるようになる。子どもに，このような気付きの広がりや深まりが見られるようになると，「体験活動の前の自分とは違った自分」が意識でき，自分自身への気付きが引き出されると考える。

実践例『もっとしりたい　町の大すき』

ねらい：町の探検に出かけ，地域の人々やさまざまな場所などとのかかわりを深めることができるようにする。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　2年生

気付きを広げ，深めていくためには，子どもがあまり意識していない気付きを，自覚できるようにしていくことが必要となる。そのために，以下の活動を取り入れ「ゆたかな学び」のポイントとした。

○　町の施設や店などを探検した時に，気付きを得た場所まで，グループの仲間を連れて行き，すごいと思った気付きを他者評価し合う「すごいこと発表会」を設定する。

○　探検で得た自分の気付きを周りにいる友だちや教員に知ってもらい，意見をもらったり，ほめてもらったりといった他者評価をし，自分の気付きのよい部分を自覚させる。

○　自分が記録してきた気付きをまとめ，「わたしのはっけんマップ」を活用して学習活動の様子を振り返るようにする。

実践の概要

①１回目の活動計画　（１・２時）

○　学区の中で調べてみたい施設や店を思い浮かべて，探検の準備をする

②１回目の体験活動　（３・４時）

○　調べてみたい施設や店の探検に出掛ける

「店や施設のすごい！を見つけよう」というテーマで，魚市場・文房具屋・花屋・コミュニティセンターを探検し，「すごいこと発表会」を行いながら調べた。

③１回目の発表会 ⇨ 子どもどうしの他者評価（5・6時）

○　探検でわかったことをまとめて，発表会の準備をする
○　自分の気付きを第１回発表会で発表する

５グループに分かれ「店や施設で見つけたものをみんなに伝えよう」と呼びかけて，発表会を行った。Ａがいる「なんで？」グループでは，印鑑とパソコンが話題となった。Ａは，グループの子が言った「大きいのりを見た」の言葉に興味をもった。

④ 子どもの自己評価 ⇨ 教員の他者評価 ⇨ ２回目の活動計画（7時）

○「詳しく伝えることができたか」という点から１回目の発表を振り返る

【Ａの自己評価】「みんながいろいろのりのことを教えてくれたので，もう少し詳しく調べたい」
⇨教員が「次の探検は，みんなが言ったのりを調べてみたら」と他者評価
⇨「次は大きいのりを調べてみよう！」

○　探検のめあてを決める

⑤２回目の体験活動（8・9時）

○　２回目の公園の探検に出掛ける

「店や施設のすごい！をもっと見つけよう」というテーマで，２回目の探検を行った。子どもは他者評価を生かし，「すごいこと発表会」を行いながら調べた。

文房具屋グループの「すごいこと発表会」

⑥２回目の発表会 ⇨ 子どもどうしの他者評価（10・11時）

○　探検でわかったことを「わたしのはっけんマップ」にまとめ，発表会の準備をする
○　自分の気付きを第２回発表会で発表する

【子どもの様子】「えっ！」「なんで？」「えっ！なんで？」（驚きと疑問の気付きをもった子ども）の３グループで「もっと，詳しく調べたことを発表しよう」というテーマで発表会を行った。Ｂは「他にどんな種類ののりがあるか見てみたら」と評価された。また，のりを詳しく調べるＢの姿に感心する子どもも見られた。全体では，１回目よりやりとりが少ない傾向が見られた。

⑦ 子どもの自己評価 ⇨ 教員の他者評価（12時）

○「もっと詳しく伝えることができたか」という点から２回目の発表を振り返る

【Ａの自己評価】　「のりについて教えてもらって，そのことを調べて楽しかった。また，なぜコピー機があるかは不思議」⇦教員は「他にコピー機でどんなことができるかな」と他者評価

⑧ はっけんマップ作成 ⇨ マップを使っての単元全体の自己評価（13～15時）

○「わたしのはっけんマップ」を参考にし，単元全体を振り返る

【Ａの単元全体の自己評価】こうしてはっけんマップを見てみると，文房具やコピー機のことで，なんで？と思ったことを調べて，いろいろなことがわかったんだなと思いました。うれしかったです。次に行ったら，ほかのこともう少し調べたいです。

実践の成果と課題

１　成果

学習後にアンケートを行った。一つ目の質問「今度探検に行くとしたら，調べてみたいことは」では，調べたいことを具体的に書くことができたのは，全体の79%であった。これは，他者評価の機会を増やしたことで，子どもが気付きを広げ，深めるおもしろさを感じることができた結果であると考える。二つ目の質問「探検をしてうれしかったことは」には，単元を通して，たくさん調べたり，詳しく調べたりすることができたことをあげている子どもが多かった。これは，気付きを「わたしのはっけんマップ」にまとめたことで，自分の気付きの数や広がりや深まりの様子が振り返りやすくなった結果であると考える。

２　課題

「すごいこと発表会」では，実際に案内するため，一つの気付きの発表に時間がかかり，多くの気付きについて評価してもらうことはなかなかできなかったので，方法の改善を考えたい。また，すごいこと発表会と比べ，２回目の発表会での他者評価がうまくできないグループが見られたので，効果的なグループ分けになるよう改善したい。

美術教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

図工・美術の制作活動は，自分の主題を色や形，空間で表現するものである。この活動によって，発想と構想の能力や創造的な技能，鑑賞の能力を育てる教科である。しかし，それだけではなく，コミュニケーションの手段，より深くお互いが理解し合うための豊かな情操を育む役割も担っている。そこで，自分の思いを表現するために，自然の美しさにふれた時の感動や，心に残る体験から生まれる感動などを大切にし，生活の中で味わうさまざまな感情にを敏感に感じとる「感性」を育てていきたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

社会に出ると，さまざまな考えをもった他者と出会うことになる。図工・美術を通して，作者の思いを幅広く感じることのできる許容力を育てることで，お互いに共感し合いながら他を尊重する心情も育めるよう学習をすすめていく。

また，敏感な感性をもっているからこそ，何かを発見し，さまざまな出来事に感動することができる。これは豊かな人生を創造していく上で不可欠な，図工・美術の学びである。表現したいという思いをもち，感動のもととなる見つける力を育てることで，より生活は楽しくなる。日常におけるものの見方や感じ方，さまざまな美しさやよさに気付くよう価値意識を養っていく。

実践例『スローアートな活動』

ねらい：「スローアートな活動」とは，身近な文化・自然・人々のよさや美しさをじっくりと見つめ直し，自分の表現に生かすために試行錯誤しながら考えを追究することを重視した活動のことである。「スローアートな活動」を通して，将来にわたって地域の文化・自然・人々のよさや美しさを十分に感じながらながら伝承していく子どもの主体的な姿をめざしていきたい。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　5年生

「スローアートな活動」では，日頃から，身の回りの出来事の中から自分が特に「いいな」と思うことを見つけ，記録する活動を行っておく。そして，表したいことの見た目の形や美しさだけではなく，なぜその色や形なのかや地域の人々の思いはどうなのかも深く見つめ直すために時間を十分に確保したい。また，自分の表現を試行錯誤する時間も必要である。そのとき，子どもたち一人ひとりの追究の仕方が異なるために，活動の速さに違いが生じる。子どもが自分なりに表現を練り上げるためには，教員がその活動から生まれてくる時間差への対応をする時間も必要なのである。そのために表現方法が異なる複数の題材を一つの主題でまとめていく。これにより，子どもが一つの主題にじっくりと迫るための時間的ゆとりを生み出して，表したいことを見つめたり考えを深めたりする時間をつくり出すことができると考える。そうした工夫で，さまざまな時間を確保することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

すてきな町
～心で感じて～

①自分が興味関心をもった身近な文化・自然・人々について振り返りながら，地域のよさについて話し合う。
②博物館・山崎川・瑞穂通商店街・学校の近くを散策し，地域のよさや美しさを見つけ発表する。
③よさや美しさを表現するために，材料を選択したり，ぼかし・マーブリング・スパッタリング・コンテを使ったスパッタリング・砂と絵の具を混ぜる技法を試したりする。
④材料を選択したり技法を試したりする場を確保し，自分の思いに合うものをつくるようにする。
⑤作品の鑑賞会を開き，それぞれ自分の作品の一番表したかった場面とそれを表すため どんな表現の工夫をしたか発表する。

子どもは対象をじっくりと見たり，調べたりしながら見つめ直すことで，対象への関心や，表現したいという気持ちが高まった。そのため，自分が表したい様子に合った表現方法をじっくりと考え最後までねばり強く取り組むことができた。

すてきな町
～町へプレゼント～

①地域にある飾りや表示，看板などについて話し合う。
②地域に飾ったり役立ったりするものを考える。
③地域の人々に自分たちが考えた飾ったり役立ったりするものについてのアイデアスケッチを見せ，よりよくするにはどうしたらいいか質問する。
④地域の人々の願いを受け，アイデアを深める。
⑤地域に飾ったり役立ったりするものを表現する。
⑥中間鑑賞会を開く。
⑦考えを見直しながら表現する。
⑧できた作品を地域に展示して，地域の人々と鑑賞する。

題材を組み合わせて一つの題材とすることで，子どもがじっくりと活動に取り組むための時間をつくることができた。また身近なもののよさや美しさを書いた「アンテナノート」の活用や地域に目を向けた題材設定は，子どもが取り組みやすいばかりでなく地域の人との交流を深めるものともなった。

音楽教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

音楽科では，表現及び鑑賞の活動を通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに，音楽活動の基礎的な能力を養い，豊かな情操を養うことがねらいである。そこで，次の三点の学習内容について重点的に指導を行いたい。

①　表現領域について

・歌唱の内容，曲想のふさわしい表現を工夫して，思いや意図をもって歌ったり，互いの歌声や伴奏を聴いて，声を合わせて歌うこと。

②　音楽づくりの活動

・音や音楽にしていくことを大切にしながら音楽の仕組みを生かし，思いや意図をもって簡単な音楽をつくること。

③　すべての領域について

・音楽を形づくっている要素を聴き取り，それらの働きが生み出すよさやおもしろさ，美しさを感じ取ること。

・音符，記号，音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

めまぐるしく変化する社会，人間関係が希薄になりつつある社会の中で，子どもたちが音楽を通して友だちとかかわり合う活動を豊かなものにして，互いに尊重し合う子どもを育てていく必要がある。また，これまでに得た学びをもとに意図をもって自分はこうしたいと考えて表現できる子どもを育てていきたい。

そのためには，音楽活動をする中で子どもに課題を乗り越えた後の楽しさを味わわせたり，自分はこの部分をこんなふうに歌いたいと友だちとともに伝え合う経験をさせたりしながら互いの表現のよさをともに分かち合い，音楽活動が深まるようにしなければならない。

こうした実践を積み重ねていけば，人とのコミュニケーションを大切にしながら自分の内面を素直に表現できる大人になっていくであろうと考える。

実践例『リズムに着目した音楽づくりをしよう』

ねらい：子どもたちが，「こんな風に表現したい」「表現を工夫するって楽しい」と意図をもって音楽の学習をするためには，自分の考えなしでは成り立たない「音楽づくり」が有効だと考え次のような指導の段階や手だてで実践に取り組んだ。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　６年生

小学校６年生において自ら考えたり，判断したりしながら自分の思いを表現することができるように，段階的に指導をすすめていった。リズムゲームを取り入れて，楽しく活動しながら，音楽を形づくっている要素や楽典などの学習を行った。この基本的な学習を生かしながら，自らの力で，リズムを創作し，友だちと試行錯誤しながらリズムを組み合わせて演奏する学習につなげていく。

つまり，基本的な学習を段階的に行いながら，一人ひとりの音楽的な力を伸ばした上で，考え判断しながら，その力を発揮し，友だちとともにつくり上げていく喜びを味わわせていく学習の流れである。このような音楽の学習の流れを工夫することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

(2) 実践の流れ

実践１　耳をすますと…（5～6月）

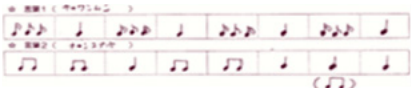
授業の導入時に音探しをする活動を取り入れ，音への関心を高める。
「音おに」

教員のリズムを模倣することで，リズムへの関心を高める。　「まねまねゲーム」

音への関心が高まる

実践２　できたよ！相生風「ケチャ」（9～10月）

「チャ」のつく言葉を集めたり，リズムボックスを使ったりして，リズムに着目する。
「相生風『ケチャ』づくり」



友だちのリズムを模倣することで，さまざまなリズムへの関心を高める。
「リズムゲームⅠ」

カードを使ってリズムをつくることで，音符や休符の長さへの理解を深める。
「リズムゲームⅡ」

リズムに着目することができる

実践３　一人一役，リズムカルテット（11～12月）

グループでのリズムアンサンブルづくりを通して，リズムをつくったり，表現を工夫したりして演奏する楽しさを味わう。「リズムアンサンブルづくり」

リズムゲームⅡに曲想カードを加えて，さらに表現の幅を広げる。
「リズムゲームⅢ」

自ら考えたり判断したりしながら，自分の思いを表現する子ども

(3) 実践を終えて

５月から12月までの実践を通して，次のような成果が見られた。

○「音おに」の活動を通して，子どもたちの音への関心を高めることができた。

○「リズムゲームⅡ・Ⅲ」では，リズムを視覚的にとらえ，音符や休符への理解が深まった。

○　実践と並行して行ったりリズムゲームは，各活動をスムーズに行う補助的な役割として有効だった。

○　ケチャやリズムカルテットづくりを通して，みんなで試行錯誤を繰り返しながらつくり上げる楽しさやよさを味わうことができた。

　これまで何となく吹いていたリコーダーを，音色や音の長さを考えて演奏する様子や，ブレスの位置や強弱に気をつけて歌う様子が多く見られるようになってきた。このことは，自分で考えたり判断したりしながら，自分の思いを表現することができるようになったことの結果だと考える。子どもたちの中からは「次は，曲をつくりたい」という声も聞かれるようになり，子どもたちの関心は，旋律や音の重なりに向きつつある。今後は，今回グループでつくったリズムアンサンブルどうしを組み合わせたり，新たに旋律をつくって重ねたりして，学級全体での音楽づくりへとつなげていきたい。

技術教育

中学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

技術教育は，子どもが生活を豊かにするための知識や技能を習得する活動を支援し，子ども自らが生活の中で考え，活用していく力をつけることをねらいとしている。そこで，問題解決的な学習や体験的な学習を通して，「生活の中での問題を自らの力で解決する資質や能力，よりよい生活のしかたを考えることができる力」を育成していく。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

子ども自らが，生活に必要な知識や技能を身につけたくなるように，一人ひとりがもっているその子らしさを大切にし，製作の楽しさや完成の喜びが感じられるよう，実践的・体験的な学習をすすめていく。

実践例『身の回りを整とんするものを設計しよう』

ねらい：板材でのものづくりにおいて，構想をまとめる活動をすることにより，製作前に検討を積み重ねることの大切さに気付くことができる。

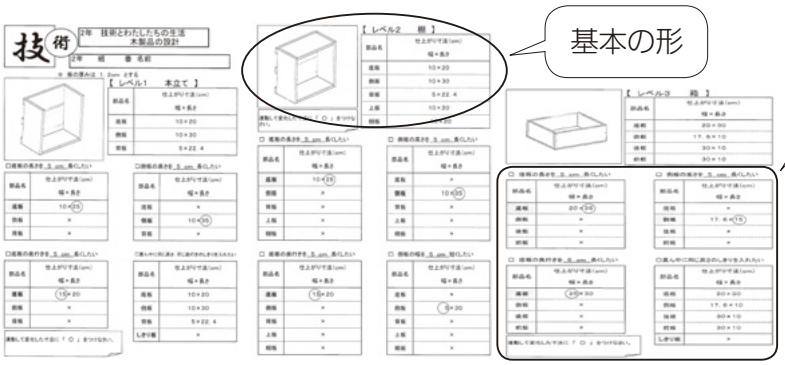
実践例における「ゆたかな学び」のポイント　1年生

ものづくりにおいて，試行錯誤して設計したものが，実際に製品となることは，大きな達成感につながる。そこで，見通しをもった設計ができる子どもの育成を「ゆたかな学び」のポイントとした。

設計の基本を知ろう
（1～7時）

①技術と私たちの生活について学ぶ。
②立体の表し方を学ぶ。
③設計の基本について学ぶ。
④段階的に設計の仕方を学ぶ。

【材料取りの仕方を発表する様子】



【段階的に設計の仕方を学ぶ学習プリント】

図法や構造についての知識を身につけた後，段階的に設計の仕方を学ぶ学習プリントに取り組んでいく。学習プリントでは，身近な生活用品である『本立て』『棚』『箱』を題材に，作図された製品の一部を寸法変更すると，どのように他の部品の変更が必要になるか考えていく。徐々に難易度があがるプリントを解いていくことにより，材料の組み合わせ方を部品の寸法に反映させることができるようになり，構想図において正確な材料取りを考えることができるようになる。

模型をつくろう（8～9時）

①スチロール板を使って班で１つの模型を製作する。
②製作をすすめていく中で，気付いたことを話し合う。
③部品の変更や追加を行う。

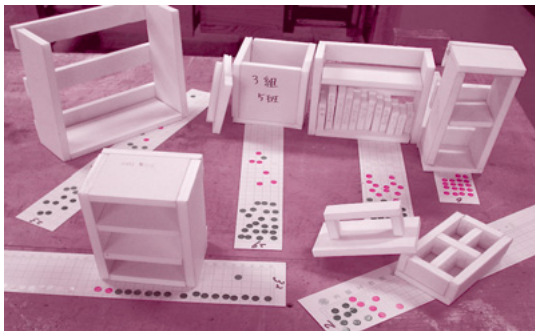
背板をつけよう！

余った材料を何かに使えないかな？

子どもたちは，班で１つの模型を製作することによって，「加工がしやすいように切断線をそろえる」「余った部品で取っ手や背板をつける」など多くのアイデアや意見を出すことができる。また，班の中で話し合いながら仲間とともに工夫し，手直しすることで，より完成度の高いものへと作品を高められる。

コンテストで学ぼう（10～11時）

①他の班の模型を評価し，投票をする。
②参考になったアイデアや感心したことについてまとめる。



奥行きや高さを調整して仕切りをつくっているのはすごいな・・・。

優れていると思ったものに，シールを貼っていく。

コンテストで互いの作品を見ることによって，それまで学んできたことを積み重ねて模型づくりができたことや，互いに学びあうことが作品の完成度を高めたことに気付くことができる。そして作品製作に向けて意欲を高め，より自分の考えを生かして作業に取り組むようになり，完成の喜びをより大きくすることができる。

家庭科教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

「学び」と「生活」をむすびつけていく教科である家庭科教育では，衣食住などに関するより充実した実践的･体験的な活動を取り入れ，生活実践力を高めていくことが，重要である。そこで，子ども自身が生活をしっかりと見つめ，課題を追究する中で，生活者としての自覚を高め，より豊かな生活を営むように自ら考え，実践できる力を身につけさせていきたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

家庭科教育では，生きる力を伸ばす上で，学習したことが実生活に生きて働く力となることが重要である。そこで，子どもの生活実態をきめ細かくとらえ，個の願いをもとに自ら課題を追究し，自ら学びたいと考えるような授業実践を追究していく。

また，教科の学習で体得した基礎的･基本的な知識や技能を実生活に生かすことができるような学習形態の工夫をしていく。

実践例『調理の基本をマスターしよう～ぼくもわたしも○○シェフ～』

ねらい：包丁やフライパンなどの調理器具の扱い方，ゆでたり炒めたりする基礎的な調理法を段階的に取り上げ，繰り返し実習することで技能の定着をはかり，家庭でも実践できる力を養う。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　６年生

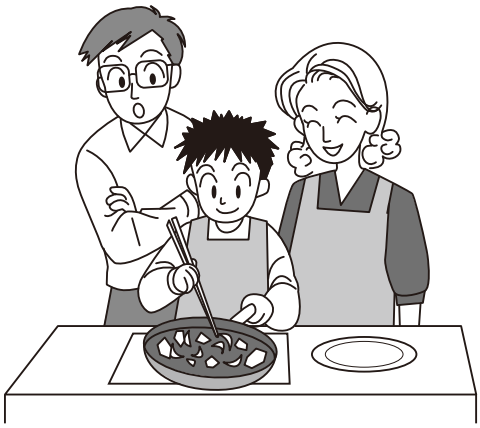
小学校６年生において，包丁やフライパンなどの調理器具の扱い方，ゆでたり炒めたりする調理法などを段階的に取り上げ，繰り返し実習することで技能の定着をはかっていく学習をすすめていった。調理実習の前には家庭で練習して家族からアドバイスをもらったり，実習後に家庭でもつくったりして，限られた授業時間では身につきにくい調理の技能を家庭と連携することで高めていった。繰り返し練習する場を確保することと家庭とのかかわりを多くもつことを「ゆたかな学び」のポイントとした。

生活を見直そう（1時）

・１日の生活時間を見直す。

家族とふれあう時間が少ないな。

一緒にご飯を食べたり，お手伝いをしたりするといいかな。



１日の生活時間を調べてみると，習い事や塾など多忙な生活をしており，家族とともに過ごす時間が少ないことに気付くことができた。「食」に対する子どもの興味を生かし，食生活を切り口にして，家族の一員として自分にできることはないかを考えることができた。

試し調理をしよう（2～4時）

・たまごや野菜をゆでたり炒めたりする計画を立てて，実習をする。

食品をゆでたり炒めたりするよさがわかったよ。

実際につくってみると上手にできないことが多かったね。おいしくつくるのは難しいな。

【試行錯誤しながら実習をする子ども】

身近な食品をゆでたり炒めたりする試し調理を行った。材料や分量，つくり方などをおさえた後，グループでほうれんそうのおひたしと野菜炒めを調理したが，フライパンを温めずに油を入れたり，「ほうれんそうの水気をしぼるってどうやってやるの？」と言ったりするなど調理計画が生かされていない子どもが多くいた。

調理の基本をマスターしよう（5～10時）

（一人一調理）

・食品をゆでる計画を立てて，調理する。
・食品を炒める計画を立てて，調理する。
・電子レンジの使い方を知り，電子レンジでじゃがいもを加熱する。

いろいろな調理の仕方がわかって，自信がついてきたね。

実習したことを生かして，もっと工夫しておいしい料理をつくってみたいな。

【一人一調理する様子】

包丁やフライパンなどの調理器具の扱い方，ゆでたり炒めたりする調理法などを段階的に取り上げ，繰り返し実習することで技能の定着をはかっていった。さらに，一人一調理によって，自分一人でつくらなければならない状況のなか，どの子どもも練習することができた。実習の前には，家庭で練習したり，料理のコツを家族に聞いたりして，家族とかかわることができた。

ぼくもわたしも○○シェフ（11～13時）

（グループ調理）

・ゆでゆでシェフ，ジュージューシェフ，レンジシェフに分かれて調理の計画を立てて，調理する。

お弁当箱につめて持ち帰り，お家の人に食べてもらおう。

○○君がつくった料理をわたしもつくってみたいな。

【各班で工夫してつくったメニュー】

基礎的な技能を学んだ後，材料や調理法をアレンジしてグループ調理を行った。メニューやつくり方をすすんで調べたり家族に聞いたりして，意欲的に活動する姿が多く見られた。グループ調理でつくったものを友だちや家族に食べてもらい，感想を言ってもらうことで，つくる喜びを味わい，家庭でもつくってみようという実践意欲につながったと考えられる。

お家でもつくってみよう（14時）

家庭での実践報告会を行った。身につけた技能を生かして，自分や家族のために料理をつくることができた。今後も家族と食べる食事のよさや自分でつくったものを家族に食べてもらう喜びを味わい，食事づくりに関心をもって家庭でも料理する子どもを育てていきたいと考える。

実践例『幼児を知ろう』

ねらい：幼児の発達と家族に関する学習を通して，自分と家庭，家庭や家族，地域とのかかわりの重要性について気付き，幼児への理解を深め，子育ての大切さや親の役割について考えることができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　2年生

中学校２年生において，幼児の観察やふれあう場を設定したり，自らの生い立ち調べを通して自分の成長を見つめ直したり，幼児をとりまく環境に関する話題を取り上げて考えたりする場を設定し，学習をすすめた。自分と家族や，家庭のあり方について考えを深めるためには，学校での学習を家庭にもどし，再び学校で取り上げ，家族の思いや考えを授業の中に取り込みながら学習することが有効であると考えた。ここを「ゆたかな学び」のポイントとした。

幼児について知ろう（1，2時）

・地域の幼児に学校に来てもらいふれあう。

自分もこんな風だったのかな，親に聞いてみたくなった。

・生い立ち調べをし，自分の成長を振り返る。

たくさんの人に支えられて大きくなったんだなあ。

【背中の園児に話しかける子ども】

普段幼児とふれあう機会のほとんどない子どもたちには，幼児の姿がイメージしにくい。そこで直接幼児とふれあう場を設定することで，幼児を身近に感じ，人の成長について考えるきっかけになると考えた。また，幼児とふれあうことで自分の幼い頃にも興味をもち，生い立ち調べにもつなげることができた。

幼児と周囲の人たちとのかかわりを考えよう　（3，4時）

・幼児にかかわる話題について，学校で取り上げ，家庭へ戻し，再び学校で話し合う。

赤ちゃんポストはあった方がいいのかなあ。

【自分の考えを真剣に書く子ども】

幼児にかかわる話題として，「赤ちゃんポスト」について取り上げた。まず，「赤ちゃんポスト」に関する記事を紹介し，自分なりの考えを書かせ，話し合った。その後，家庭でも話題にして，意見を聞いてくるようにし，再び話し合ってみた。子どもだけの考えとは違い，親の立場でのさまざまな思いや考えを知ることができ，子育てと家族，家庭と地域社会などについても考えることができた。

幼児の成長と遊びの関係を探ろう（5～8時）

・幼児にとっての遊びの意味を考える。

幼児と仲よく遊びたいなあ。

・幼児と遊ぶ計画を立てる。
・幼稚園，保育園訪問。

幼児はかわいい。笑顔が大切だ。

【園児と笑顔でふれあう子ども】

幼児の生活の中心である遊びについて考えさせ，実際に幼児と一緒に遊ぶ保育園訪問を実施した。はじめこそ戸惑いを見せる子どもたちであったが，すぐに園児と仲よくふれあうことができ，普段教室では見せないようないきいきとした表情を見せていた。

わかったことをまとめよう（9時）

幼児の成長についての学習，保育園訪問でわかったことを，それぞれ絵を入れたりしながらわかりやすくまとめた。

保健体育（保健）　小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

保健に関する基礎・基本とは，健康に対する現代的な課題に適切に対応し，生涯にわたり健康で活力ある生活を送るための心や体を育むことである。毎日を健康に過ごせるような実践力を身につけさせていきたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

自ら学び，自ら考え，主体的に行動できる力を育むため，「子どもが主体となるための健康教育」をめざし，子どもが自ら課題を見つけ，解決の方向を見出していく力を育むための指導・支援のあり方を考えていく。また，他教科や総合学習との関連や，学校・家庭・地域が一体となった取り組みを充実させていく。

実践例『はやね！はやおき！げんきいっぱい！！』
―睡眠に重点を置いた生活習慣指導―

ねらい：子どもたちに健康でいきいきと学校生活を送ってほしいと願い，生活のリズムを整えるために睡眠に重点を置いた生活習慣指導を行い，自分の問題としてとらえ，改善していくことができるようにする。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　4年生

自らが「発見」「体験」することによって，自分の問題点に気付き，より健康な生活を送ろうとする力を高めたいと考え実践をすすめた。また，保護者へも働きかけることで，家庭との連携を強めたいと考えた。このように，保健の学習を工夫することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

学級活動（保健指導）による睡眠指導

①睡眠にはリズムがあることと，睡眠と成長との関係を知る。
②成長ホルモンが出るための条件を知る。
③睡眠リズムと成長ホルモンのグラフから，よりよい睡眠を発見する。

睡眠リズムと成長ホルモンとの関係に気付いた子どもたちは，どうしたらより多くの成長ホルモンを受け取ることができるかを考えた。その中で，よりよい睡眠のとりかたについて発見することができた。

わたしは，夜11時30分ぐらいにねるから，あまり成長ホルモンが出ないことがわかりました。だからこれからは，なるべく9時くらいには寝たいです。

児童保健委員会活動による睡眠指導

①早寝早起きは，本当に体によいのか，一週間実践してみる。
②実践の結果と，感じたことを新聞にまとめ，全校に発表する。

早寝早起きを実際に体験してみることによって，からだの様子がだんだんと変わり，「早寝早起きは気持ちがいい。体がすっきりする」と，早寝早起きの大切さに気がつくことができた。

保健委員会睡眠実験カード

なまえ

	7／9	7／10	7／11	7／12	7／13
寝る時間 9時30分	×	○	○	○	○
起きる時間 6時30分	○	○	○	○	○
感想	9時30分はすぎたけど，10時前には寝れた。朝はスッキリした。	9時にふとんに入ってちゃんと寝れた！朝はきもちよかった。	9時30分前には寝てた！朝は少しねむかった。	今日も9時30分前には寝れた。朝は少しねむかった。	9時30分前に寝た。朝は目標よりも30分早かった。

・目標の時間に寝て起きましょう。きちんとできたら○，できなかったら×をつけましょう。
・体の調子など，感想を書きましょう。
・5日間，がんばりましょう。

1週間続けた感想を書きましょう。

はじめは寝れなかったけど，だんだん寝れるようになった。朝は早く起きてきもちがよかった。

「ほけんだより」を使った睡眠指導

全校に啓発するために，睡眠に関する「ほけんだより」を，4回発行した。睡眠リズムについて，成長ホルモン，ぐっすり眠るための工夫，寝不足が体に与える影響について，それぞれ特集した。

「ほけんだより」を活用することによって，全校に啓発することができた。また，イラストを多くしたり，クイズを載せたりすることによって，興味･関心を高めることができた。

学校保健委員会を活用した保護者への働きかけ

睡眠についての実践内容を学校保健委員会で報告し，協議した。その内容については，「ほけんだより」に載せ，全家庭へ知らせた。

家庭との連携をはかるために，学校保健委員会の場を活用したことによって，家庭での様子を聞くことができたほか，学校医から専門的な立場の意見も得ることができた。

しっかりと体を動かした日は，翌日，すっきりと起きられることが多いです。眠りの質が重要なのですね。

最近では，パソコンや携帯，テレビなどの影響も大きいと思います。

保健体育（体育）　小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

体育における基礎・基本とは，それぞれの運動領域で必要な体力や技能を身につけること，また，それらを身につけるための学び方を理解することである。そのためにも，各学校において，系統性を考慮した教育課程編成を行い，体育における基礎・基本の定着をはかっていくことが重要である。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

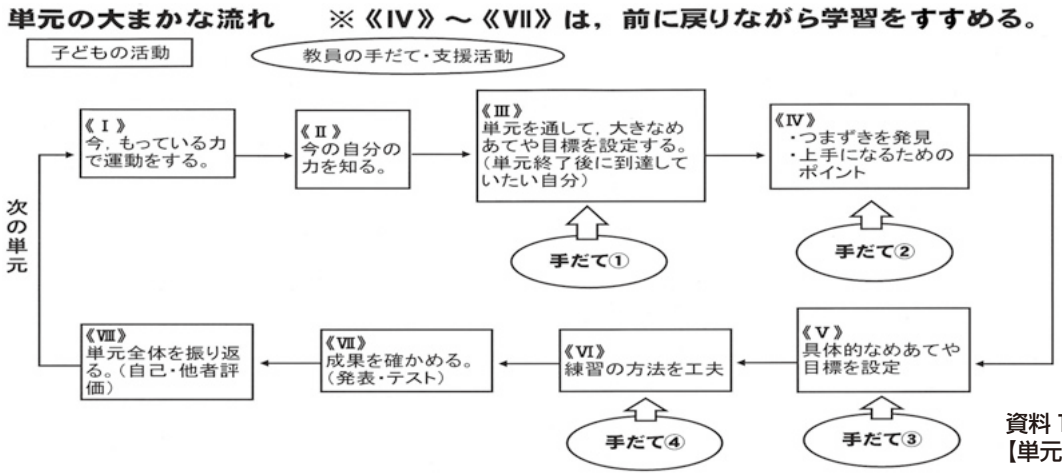
情報が錯そうする社会や子どもたちをとりまく環境を考えると，小学校期に，生涯を通して生きていくために必要な基礎的な能力を身につけることや，目標を自分で決め，それにむかって取り組んでいくことが大切である。この積み重ねによって，子どもたちは，よりよい社会をめざして自らが考え行動しようとする心や力を育んでいくと考える。そこで，体育学習において，「わかった」と必要な体力や技能を身につける学び方を理解する，「やってみよう」と主体的に取り組む，を重点として学習をすすめていく。

実践例『短距離走・リレー』

ねらい：全力で走ったり，リレーをしたりすることを通して，記録に挑戦したり競走したりする楽しさを味わうことができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

「わかった」と学び方を理解するために，課題解決的な学習の工夫をした。具体的には，課題解決に向けた練習方法を紹介し，それを選択させる単元構成（資料１）をした。さらに，学習の見通しをもたせるための学習カードを用意した。また，「やってみよう」と主体的に取り組むために，課題解決への手だて・支援を工夫した。具体的には，個人・チームの課題解決のための練習の場やルールを工夫した競技会の設定をした。このように，「わかった」「やってみよう」と子どもが主体的に取り組める授業を工夫することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

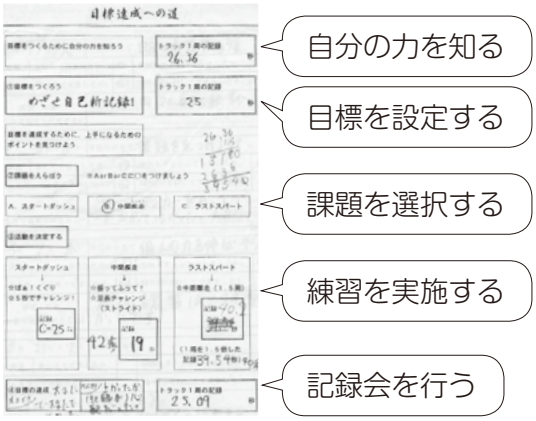


資料１
【単元構成】

学習の見通しを立てよう（1時）

今後の学習の流れがわかる学習カード（資料２）を配付し，①自分の力を知る②目標を設定する③課題を選択する④選択した練習を実施する⑤記録会を行う，といった単元の流れを把握させることとした。

これをもとに，個人やチームの課題解決にむけて取り組み，短距離走やリレーで必要な体力と技能を身につける学習をすすめていった。



資料２【学習カード】

短距離走やリレーを楽しもう（2～6時）

短距離走やリレーにおいて，個人の課題解決に向けて取り組むために以下のような練習方法を用意し（資料３），子どもたちがいつでも練習方法を選択することができるように学習カードに記載した。

a-1　スタートダッシュの課題解決に向けた練習方法
「バー，くぐり」……低い姿勢でスタートを行う練習
「５秒チャレンジ」……短い時間で走ることのできる距離を伸ばす練習

a-2　中間疾走の課題解決に向けた練習方法
「振ってふって！」……両腕を振る意識をつける練習
「足長チャレンジ」……走る歩幅を広げる練習

a-3　ラストスパートの課題解決に向けた練習方法
「ロングラン(１．５周走）」…全力で走りきることのできる練習

資料３【課題解決に向けた練習方法】

子どもたちは課題をはっきり見つけて練習をすることができた。学習カードで選択した練習方法に応じた支援を行うことで，課題を見つけやすくなりその課題解決にむけて意欲的に練習する姿が見られた。

また，資料４のように，リレーで必要な技能の一つであるバトンの受け渡しについて，チームで話し合いながら，どのように練習をすれば記録が伸びるのかを考え，課題解決に向けて主体的に取り組む姿が見られた。

資料４【練習の様子】

今回の実践から，子どもたちに学び方がわかるように単元構成をして，学習の流れがわかるような学習カード，課題解決に向けた教材の工夫・支援の工夫によって，体育学習における基礎・基本の定着につながっていくと考える。

自治的諸活動と生活指導　小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

子どもたちが，何か学習するとき，何に対しても意欲的な姿勢で取り組もうとする気持ちが身についていると，学ぼうとする意欲も出てくるのではないかと考える。また，周りの子どもたちとの間に良好な人間関係が築かれていると，互いに意見を出し合ったり，教え合ったりすることができ，学ぶ意欲へとつながると考える。本部会では，子どもが意欲的に取り組むことができたり，互いに良好な人間関係を築くことができたりする実践に取り組んできた。こうした実践は，子どもたちが学力的な「基礎・基本」を身につけるための土台になっているのではないかと考える。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

本部会では，「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに研究討論をすすめてきた。「たくましく生きる子ども」とは，複雑・多様化している現代社会の中で，主体的に生きていこうとする力であると考える。ただし，子どもたちがどのようなことに対して主体的に取り組んでいくかは，子どもの気持ちや個々のおかれた状況によって異なってくる。そこで本部会では，子どもの気持ちを大切にし，実態を正しく把握した上で，やる気を引き出し，主体的に取り組もうとする気持ちを育てていくことが，「生きる力」を伸ばしていくために大切な点になると考える。

実践例『自分の目標に向かって，意欲的に行動しよう』

ねらい：子ども一人ひとりが自分の目標を具体的に設定し，それを達成するために見通しをもって活動する体験を，学校生活の中で積み重ねていく。目標の達成にむけて，自分の力をどこに傾注すればよいのかを常に意識し，最後までやり遂げようとする努力を持続させながら，目標を確実に達成することができるようにする。

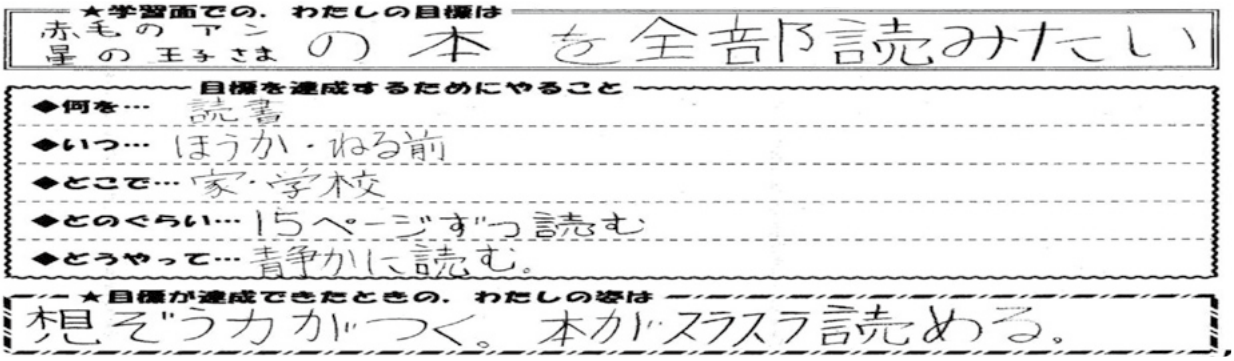
実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

子どもが活動する際に，「目標の設定」→「目標達成にむけての活動」→「振り返り」という３つのステップを取り入れ，子どもが各自の目標の達成にむけて，計画的に活動することができるようにする。そうした活動を通して，子ども一人ひとりが自分の目標にむかって，意欲的に行動することができるようになることは，「基礎・基本」を身につけようとする意欲を高め，そして「生きる力」を伸ばすことになると考える。本実践では，特に目標設定の段階で，目標達成に向けての活動を見通すことができる，具体的な目標を設定することを重視した。そうしたことを重視して子どもを育てていくことを「ゆたかな学び」のポイントとした。

１　目標設定の大切さに気付く活動

目標を達成するためには，漠然とした目標を立てるのではなく，具体的な目標の設定が大切であることを，子どもに認識させる必要があると考えた。そこで，学習面や生活面において，一人ひとりが最も取り組みたいと思う内容を目標として設定し，１週間活動することを行った。

そして，活動の時間や量，活動を行う場面など，目標の達成にむけての行動を，次のように５つの項目について定め，具体的なものにしていった。


★学習面での，わたしの目標は
赤毛のアン 星の王子さま の本を全部読みたい
目標を達成するためにやること
◆何を… 読書
◆いつ… ほうか・ねる前
◆どこで… 家・学校
◆どのぐらい… 15ページずつ読む
◆どうやって… 静かに読む。
★目標が達成できたときの，わたしの姿は
想ぞう力がつく。本がスラスラ読める。

上記のように，Ａは，決めた本を読破することを目標とし，そのために学校と家庭で15ページずつ読むことを定めた。Ａは，学校では放課ごとに熱心に読書に取り組み，本を着実に読みすすめていった。最後の振り返りでは「これからも続けてみたい」と記述しており，その後も自主的に読書を続けたり，また，国語の学習では積極的に挙手をし，すらすらと音読をしたりする姿が見られた。

このように，具体的な目標を設定することにより，子どもはその達成にむけて見通しをもって活動することができた。

２「目標ナビ」を活用して目標に取り組む活動

「目標ナビ」とは，まず，自分の目標を中心に記入し，その達成のために考えた方法を，目標の周囲に記入していくものである。さらに，考えた方法を具体的にするための事柄（いつ行うのか，どこで行うのか，など）を，方法の周囲に記入することにより，目標を中心にして，達成方法や具体的な事柄が，枝葉のように記入されている図ができあがっていく。

子どもは，このようにして作成した「目標ナビ」を基に，必要に応じて方法を加除・修正をしながら１週間活動を行い，目標が達成できたかを振り返った。

【Bの目標ナビ】

「リコーダーがすらすらふけるようになりたい」という目標を立てたＢは，右のように，自分ができると思うことを次々と記入し，一度「目標ナビ」を完成させたあと，いくつかの項目を×で消し，実際に取り組むことを精選していった。

そうして，家で苦手なところを繰り返し練習したり，母親に聞いてもらい，うまくふけなかったところを指摘してもらったりするなど，熱心にリコーダーの練習に取り組み，計画通りに活動をすすめていった。活動後の音楽の授業では，指づかいもスムーズで自信をもってリコーダーを演奏しており，授業後には「練習しただけあって，一度も間違えたりせずに吹くことができた」と，うれしそうな表情をしていた。このように「目標ナビ」の活用によって，子どもは各自の目標の達成にむけて取り組むべきことをはっきりさせながら，最後までやり遂げることができた。また，自分の目標を達成するための方法を，より多く考えることができるようになってきた。

自治的諸活動と生活指導　中学校

実践例『人間関係づくりと連携を生かした実践』

ねらい：小グループ内などで，相手のことを考えた話し合い活動や，周りの人のよいところを見つける活動を通して，自分の考えを周りの人に伝えたり，相手のことを考えたりすることができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　1年生

子どもたちが学校生活を送るとき，子どもの気持ちを大切にし，実態を正しく把握しながら指導を行うことを大切にしたい。そうした上で，意欲的に取り組むことができたり，良好な人間関係を築くことができたりする活動をすすめていくことは，「基礎・基本」を身につけようとする意欲を高め，そして「生きる力」を伸ばすことになると考える。そうしたことを重視して子どもを育てていくことを「ゆたかな学び」のポイントとした。

1　グループで「一枚の絵」を描くことを通して，集団の中の自分を考える実践

日頃の子どもの様子を見ていると，日常生活において悩みや不安をかかえている子どもが少なくなかった。Aもその一人で，自分の考えをあまり周りの人に言わずに悩んでしまうことが多かった。また，体調不良をうったえて保健室に行くことが多く，週明けは学校を休みがちであった。

そこで，子どもたちが，人とのかかわりを感じ，自分を見つめさせることができることをねらいとして，非言語型のコミュニケーションゲーム「一枚の絵」を実施した。4，5人のグループをつくり，子どもが思い描きやすい「旅行」をテーマに描かせた。その後，集団の中の自分の役割について考えさせ発表し合った。

【Aのグループの作品】

〈集団の中の自分の役割〉
① リーダー
② 協調派
③ 寄り道屋
④ まとめ
⑤ アイデアマン
⑥ 気配り屋
⑦ こだわり派
⑧ 消極的に参加
⑨ 目立ちたがり屋

このゲームを通して，子どもは非言語のコミュニケーションの難しさを感じながらも，クラスの中の自分について少しずつ考えることができた。

〈Aの感想〉
わたしは，今日のゲームでは，人に合わせていくタイプだった。でも普段は違うと思う。

2　相手も自分も大切にした言葉で伝えようとする実践

相手も自分も大切にした自己表現（アサーション）を説明したうえで，普段の自分の言葉づかいや態度について振り返ることができることをねらいとして実施した。そこで，日常生活の中で起こりそうな場面を設定し，子どもに登場人物の気持ちを考えさせた。

〈場面設定〉
　１ヶ月前に太郎君は花子さんにとても大切にしている本を貸した。しかし，花子さんはなかなか返してくれない。２週間前に「この前貸した本，そろそろ返してくれない」と花子さんに言ったが，「いいじゃん，もう少し貸して」と言われた。しかし，太郎君は，とても大切な本なので，できるだけ早く返してほしいと思っているが…。

　子どもが太郎君の立場になって考えたとき，花子さんを傷つけずに，そして自分の要求もわかってもらえるための言い方を考えるのには苦労していた。まず，個々に言い方を考え，その後グループに分かれ，意見を交流した。そして全体の場で意見を出し合い，意見を聞く中で，いろいろな言い方があることを知ったり，自分の言葉づかいで友だちが傷ついたりすることもあることに気付く子どもがいた。また，これからは自分だけでなく，相手のことを考えて話したいという意見が多く出た。Ａは最初，自分の考えを言えずにいた。しかし，もじもじしながらも，グループの中で，太郎君の立場になって発言することができた。普段あまり発言しないＡが，「言えてよかった」「言えばいい」と考えることができたことは，言うことの大切さ，伝えることの大切さを体感することができたように感じられる。

〈Ａが太郎君として言った言葉〉
　あれ，わたしの大切な本なんだ。読んだら早く返してね。

〈Ａの感想より〉
　今日は，太郎君になって言えてよかった。言えばいいということがわかった。

３　自分のよさや友だちのよさを見つけようとする実践

　友だちのよいところに気付いたら，その内容と宛名，差出人を記述して，各クラスや生徒玄関に設置した箱に入れる活動を始めた。最初は内容的にも量的にも薄いものであったが，全校朝礼で紹介する機会を設けることで軌道に乗っていった。ある日，ＡがＢに窓ふきを手伝ってもらったとき，Ａが出した「よいとこ見つけカード」の中に「ありがとう」や「とっても」という言葉が使われていた。また，「今度は，わたしが手伝う番」という記述も見られ，相手のことも自分のことも考えた言葉を選んでいることがうかがえる。また，その言葉に対し，Ｂが出した返事のカードにも，Ａのありがとうという気持ちに対して「ありがとう」「これからも手伝う」という記述があり，互いに認め合うようになってきた様子がうかがえる。子どもが相手のことを考えながら，自分の考えを伝えることができるようになるには，「よいとこ見つけ」は効果的であったように思える。

〈ＡがＢに書いた「よいとこ見つけ」〉
　掃除の時，わたしが窓ふきをしていたら，手伝ってくれてありがとう。とってもうれしかったです。今度は，わたしが手伝う番だね。これからもよろしくお願いします。

〈ＢがＡに返した「よいとこ見つけ」〉
　「ありがとう」って言われて，とってもうれしかったです。ありがとう。これからも手伝うね。よろしくね。

　実践後のある日，Ａの保護者と話した際，Ａについてこんな話をされた。「学校のことをよく話すようになったんです。友だちのことや先生のこと，失敗しちゃったことも，にこにこして話すんですよ。わたしもうれしくなっちゃって…。」
　Ａは日常生活の中でも，周りの人と自らかかわろうとする意欲が，少しずつ出てきたように感じられるようになってきた。

障害児教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

障害児教育の基礎・基本は，障害のある子どもが自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばしていくことである。学習の成果が生活に生かされていくことで，子どもの自信を深め，自立や社会参加の基盤を育てることができると考える。

そこで，障害や発達段階を含めた子どもの実態を的確にとらえ，生活に生かされる能力を育て，子どものもつ可能性を伸ばしていく。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

「生きる力」とは，子どもの主体性や創造性を育てながら，体験や知識をもとに自ら判断し，行動できる力と考える。「生きる力」を伸ばすために，作業的な活動や体験的な活動に取り組むことに重点をおき，学習をすすめていく。

実践例『伝える力を高める学習』

ねらい：様子や行為，出来事を整理して話したり書いたりすることや，表情や身振りで表現することといった伝える力を高める。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント

自分の思いや考えを他の人に伝える力を高めることができれば，相手に理解を求めたり，自分の欲求を満たしたりすることができると考える。しかし，障害がある子どもは，言葉や感情を理解することや事柄や場面を頭の中で整理することが苦手であることが多い。そのため，相手に伝わるように話をすることが難しい。

そこで，絵カードや写真，動画などの視覚でとらえやすい教材を使う。そして，その内容を話すことや書くこと，身振りで表現して伝えることができるようにすることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

実践の経過

単元名「何をしているのかな」（6月中旬～10月中旬）

○　友だちが活動に取り組む様子を見ることができる。
○　友だちの行動を見て言葉や身振りで伝えることができる。

【活動の内容】

①「男の子が手を洗っています」「女の子が本を読んでいます」など，約20種類の絵カードを見て答える。
②自分や友だちが字を書いている様子や遊んでいる様子の映像を見て，その様子を話したり，身振りで伝えたりする。

絵カードを見て答える活動では，絵の様子と違うことを話したり，教員の言葉を聞いた後に模倣して言ったりする姿が見られたが，繰り返すうちに，「わかったよ」と自ら手をあげて正しい内容を答えることができた。また，言葉で言うことが難しい子どもも，絵と同じ格好をして答える姿が見られた。

映像を見て答える活動では，「ぼくだぁ」「○○（友だちの映像を）見せてよ」「○○（友だち）字書いてるよ」と自分や友だちの様子が画面に映ることに喜び，画面に集中する姿が見られた。そして，ホワイトボードに「□くん（さん）が，□をしています」と話し方を書き示し，「□の中にどんな言葉が入るかな」と言葉をかけると，ホワイトボードを見ながら「○○くんが漢字を書いています」と友だちの様子を話す姿が見られた。

単元名「文章の読み書き」（12月～）

【ねらい】

○カードや映像を使い，文章の読み書きに意欲的に取り組むことができる。
○文章を正しく読み書きすることができる。

【活動の内容①】

①言葉・文字カードを選ぶ。
②選んだカードをホワイトボードにはり，文章をつくる。
③つくった文章を読む。
④みんなで読む。

【活動の内容②】

①友だちが活動する映像を見る。
②活動の様子を書く。
③書いた文章を読み，正しく書けているかどうかを確かめる。
④みんなが終わったら次の問題に取り組む。

言葉や言葉をつなぐ文字が書かれたカードを並べ，文章を完成させる活動では，自分の好きな言葉を選び文章をつくると（写真１）「○○くんが給食を食べています」とその文章を元気よく読み上げることができた。また他の子どもも同じように読み上げ，その後読みやすい文章には「気持ちがいい」と言い，また読みにくいときには「なんか違う」「気持ちよくない」と言った。また，話すことが難しい子どもも，友だちが読み上げる文章を聞き取り，その様子が示された写真カードを選び取ることができた。

【写真１　言葉カードを選ぶ子ども】

映像を見て文章を書く活動では，映像の中に自分が出てくることを期待しながら楽しんで活動に取り組むことができた。「○○くんが～をしています」とつぶやきながら，文章を書く姿や文章が完成すると「先生，できた。見て」と正解を確かめようとする姿が見られるなど意欲的に活動に取り組むことができた。

実践のまとめ

写真や映像など視覚に訴える教材を使うことで，子どもは書くべき内容を明確にすることができ，目で確かめながら正しく文章を書けるようになり，内容を伝えることができた。視覚に訴える教材は，様子や行為・出来事を整理して話したり書いたりすることや，表情や身振りで伝える力を高める上で有効であったと言える。今後も，一人ひとりに応じた伝える力を伸ばしていきたい。

実践例『声を出すことを中心とした国語科授業の工夫』
ーかるた暗唱を通してー

ねらい：かるた暗唱などを通して，声を出して自分の気持ちを表現することができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント

「読む」「書く」「聞く」「話す」という力をつけ，日常生活に必要な国語についての理解を深め，表現する能力と態度を育てることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

1 はじめに

特別支援学級の特徴である，異なる学年・異なる能力の子どもたちが，それぞれの目標で取り組む国語の授業の形として，以下のようにすすめてきた。授業の柱である「読む」「書く」「聞く」「話す」という力をつけるために，50分の授業のうち20分の曜日別の学習内容を次のように決めた。

月	休日の日記（若あゆ日記を使用）・休日のスピーチ〈話す〉
火	短文の聴写〈聞く〉〈書く〉
水	カタカナチャレンジ・漢字チャレンジ〈書く〉
金	かるたの暗唱〈読む〉〈話す〉〈書く〉

毎週月曜日の「休日のスピーチ」では，子どもたちの家庭がかいまみえ，火曜日の短文の聴写では，集中して話を聞き，水曜日のカタカナと漢字のチャレンジでは競争心をあらわにして夢中になれた。

今回は，金曜日の「かるたの暗唱」についての実践を紹介する。

かるたの学習の目標を，特別支援教育の国語の目標に照らし合わせてみると，

日常生活に必要な国語についての理解を深め，表現する能力と態度を育てる。

〈読む〉語句・文及び文章を正しく読む。　⇨ かるたの言葉の意味をつかむ。
〈聞く〉話の内容を大体聞き取る。　⇨ ５・７・５のリズムで語句を覚える。
〈話す〉見聞きしたことを正しく話す。　⇨ 覚えた文章を正しく話す。
〈書く〉簡単な手紙や日記を順序立てて書く。　⇨ 覚えた文章を正しく書き表す。

2 指導の実際

（１）かるたの暗唱で期待できる学習効果

☆リズムを感じながら，音読できる。
☆文が短く，覚えることが容易である。
☆手を動かしながら，学習をすすめることができる。

（2）子どもの目標

A

実態　記憶力はよいが，早口で，一度誤って覚えた文を頭の中で変更することが難しい。

目標　一言一言を大切に，ゆっくりとわかりやすく話す。
すべてのかるたを正確に暗唱する。

B

実態　記憶力はよいが，文字を書くことが苦手で，表記の間違いが多い。

目標　覚えた文を正しく書き表す。
すべてのかるたを正確に暗唱する。

（3）授業のすすめかた

ア　2007年度の試み

・リズムのよい「食育かるた」を使い，かるた学習をすすめた。
・選定した理由は，本学級は調理実習が多いことと，本校が給食の残菜率がゼロであることから，「食」についての学習を重ねてきているからである。

食育かるたの文例

＊あさごはん　あつまれ　あさの　ありがとう
＊いちばんに　いただきますが　いえました
＊うれしいな　うまさをきそう　うんどうかい

➡ まずは，結句のみを空欄にしたカードとプリントをつくり，暗唱を試みた。

まず，自分の名前の平仮名のかるたを覚えよう！
例：ひがしやまなおこ（８枚）

➡

自分の名前をマスターしたら，
50 音にチャレンジ！
「今日は５つ！」「今日は３つ！」と変化をつけて課題を出す。
大いに目立つ達成表も忘れずに！

➡

定期テストで力試し！

イ　2008年度の試み

・本年度は「もったいないばあさん」のかるたの暗唱に挑戦した。朝礼で校長先生が語られた環境問題がヒントである。
・Ａ５サイズの大判かるたの絵札をつくり，黒板に貼り，一斉授業で試みた。

「もったいないばあさん」かるたの文例

＊なおして　つかわないの　もったいない
＊みずの　だしっぱなし　もったいない
＊うみを　よごすの　もったいない
＊よぞらを　みあげないの　もったいない

かるたの特徴で，すべての札が「もったいない」で終わるので，結句を（　）にできない。

➡

何が「もったいない」のか，読み札の内容を理解していく授業に方向転換！

➡

初句を聞いて，
「海の話か！」と句が浮かび上がる。
ここからは，自分の名前のかるたから覚える。

３ 指導の結果

2007年度の実践では，結句を空欄にしたことで，初句を聞いてリズムよく全文を言えてしまうことに担任自身が驚いた。「こんな近道があったのか！」という発見である。Aは，予想通りすぐに覚え，リズミカルに言葉を繰り返していた。ゆっくり暗唱させるため，クラスで発表の場を設けた。Bは，覚えは早く，すぐテストにのぞむが書き間違いが多かった。なかなか満点が取れず何度も書き直し，字を書く回数が増え悲鳴をあげていた。それでも２人とも，かるたの内容がよかったので楽しむことができた。2008年度は，かるたの選定に問題があった。語呂が悪いのと，前年度の食物に比べて，環境問題は考える範囲が広い。とらえにくく，一度覚えても，記憶から引っ張り出してくるのは難しかった。

環境問題と教育　小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

最近の議論の中で，環境教育を考える視点をあげている。それは「環境から学ぶ」「環境について学ぶ」「環境のために学ぶ」の３点である。環境教育における基礎・基本とは，豊かな自然や身近な地域社会の中でのさまざまな体験活動を通して自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心を培うこと，すなわち「環境から学ぶ」ことであると考える。環境教育では，身近な自然や地域社会を生かした体験活動から見出した課題を，主体的に解決していく過程によって生きる力を身につけていく。「環境から学ぶ」活動は，解決すべき問題を見出し，主体的に活動していくための出発点になる活動であることから，環境教育の基礎・基本として重視する必要がある。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

他の教科と同じく，環境教育においても自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育むことをめざしている。体験的な活動だけでなく問題の解決をめざした活動や探究的な活動を一層充実させることが求められていると考える。そのためには，子どもが学び合う活動や，地域に向けて考えを発信し，地域と交流しながら活動をすすめていくなど，他者と協同して課題を追究していく活動が効果的である。

実践例『地球を守ろう！』

ねらい：自分たちの生活が原因で環境が悪くなっており，他の生きものが苦しみ，絶滅の危機にあることに気付くことができる。そして，環境問題を解決するために，自分にできることを考え，実行することができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

小学校５年生の環境学習において，環境問題への気付き，考える，行動する，広めるという流れで学習をすすめていった。

環境学習を通し，自ら課題を見つけ，自らの生活を振り返り，自主的な活動をすすめていくことで，自分と地球の生きものとのかかわりを重視することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

地球の生きものを助けよう
（１～６時）

①地球温暖化の原因を調べよう！
②地球上で何が起こっている？
③ウミガメの産卵と気温の関係について調べよう！
　・本やインターネット，ビデオで調べ学習を行う。（①～③）
④わかったことを発表しよう！

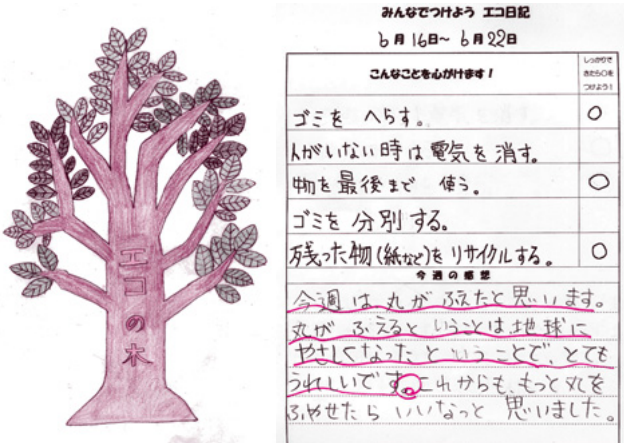
【調べ学習の様子】

地球温暖化の原因や地球上で起こっている問題を調べたり，ウミガメの産卵が温度によって，雄・雌を産み分けていることを調べたりすることで，「人間の活動が原因となって地球温暖化がすすみ，ウミガメなどの生きものが絶滅の危機をむかえてしまう」ということに気付くことができ，「生きものを助けたい」「地球のために何かしたい」という気持ちをもつことができる。

自分たちの生活を見直そう
（7～12時）

①自分たちにできるエコ活動は何だろう
- 学級で「もったいないストップ宣言」を考える。
- 「燃料電池自動車」に乗ってみる。

②「エコ日記」をつけよう！
- 自分が取り組むエコ活動を書き，できたら○をつけ，葉っぱに色を塗る。



【子どもがつけたエコ日記】

学級で無駄をなくす「もったいないストップ宣言」を考えることで環境問題を解決するために行動をしようという気持ちをもつことができる。燃料電池自動車の試乗では，現時点で自分たちにはできないこともあるが，工夫すれば環境問題解決のためにできることがあるということに気付くことができる。

また，「エコ日記」をつけることで，子どもの意欲を高めることができ，自分にできるエコ活動を無理なく継続して活動をすすめていくことができる。

みんなに呼びかけよう
（13～18時）

①友だちに紹介しよう！
- 学級に大きな木をつくり，自分のエコ活動を葉っぱに書いてはる。

②家族と一緒にやってみよう！
- 授業参観の場で，自分たちのエコ活動を紹介する。

③世界へ発信しよう！
- 「エコ標語」をつくり，学校ＨＰに掲載する。

【木に葉っぱ（エコ活動）をはる様子】

【ＨＰに掲載されているエコ標語】

自分のエコ活動を他の人に広める活動を通して，地球とともに生きるものを大切にするために多くの人々が協力していくことが必要であることに気付くことができる。このことは，生きものをはじめ，さまざまなものを大切にしようとする態度や，他者と協力し助け合って生活しようとする態度を育てる基盤になると考える。

情報化社会の教育

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

情報化社会に生きる子どもたちは，氾濫する情報から必要な情報を選択し整理する能力，自ら発信し，他とのコミュニケーションを深める能力が求められている。

そこで，以下の４点を基礎・基本と考え，追究をすすめたい。

・情報メディアの基本的な操作を行うことができる力。
・目的に応じてさまざまな情報を適切に収集・選択，整理・分析する力。
・受け手にわかりやすく情報を発信する力。
・情報モラルの必要性や情報に対する責任について考えることのできる力。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

身近なものから情報はとぎれることなく流れてくる。その情報に惑わされてしまう子どもたちも多い。情報活用能力を確かなものにするために，情報を主体的，批判的に活用する力を伸ばすことが必要である。また，著作権や個人情報の保護などの情報モラル教育を身につけることで，情報化社会において豊かにコミュニケーションできる能力を伸ばしたい。

実践例『メールを使ったコミュニケーション』

ねらい：メールを使ったコミュニケーションを体験したり，疑似体験を交えてその問題点を考えたりする活動を通じて，ネット上でのコミュニケーションを安全かつ楽しく行うための情報モラルを身につけさせる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

小学校６年生において，メールを使ったコミュニケーションを疑似体験し，その問題点を考えることを通して，相手の顔が見えないネット上でのコミュニケーション方法を学ぶ活動をすすめていった。

情報化社会の教育として，情報モラルと関連させ，疑似体験を通じて自らが発信する情報に対する責任について考える活動を取り入れることで，相手を思いやり豊かにコミュニケーションできる能力を伸ばすことを「ゆたかな学び」のポイントとした。

メールを体験しよう（1～2時）

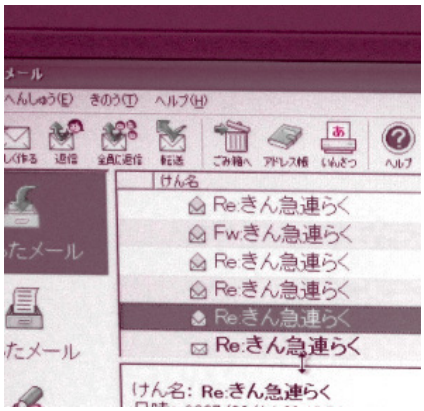
①メールを体験する。
②メールのよい点，悪い点を考える。

メールのやりとりって簡単だし，気軽に送れるから楽しいな。でもふざけた内容のメールも届いたぞ。

友だちとメールのやりとりを行う過程で，うれしかったり，不快な気持ちになったりした経験を通じて，メールのよい点・悪い点を見つけることができる。

チェーンメールって何？（3～4時）

①パソコンを使ってチェーンメールを疑似体験する。
②チェーンメールの特徴について考える。
③実際に出回ったチェーンメールの事例について，自分が受け取った時の対応方法を考える。
④正しいチェーンメールへの対応方法についてまとめる。



友だちから同じメールがたくさんやってきたぞ。迷惑だな。

子どもたちは，実際にチェーンメールを体験することで，チェーンメールとは，送る側の思いに関係なく相手を迷惑や不快な思いにさせることに気付くことができる。また，過去に実際に出回ったチェーンメールについて詳しく知ることで，万が一，今後自分が同じようなメールを受け取った場合の対応について落ち着いて考えることができる。

メールを使ったコミュニケーションについて考えよう（5～6時）

①メールのよい点を振り返る。
②「メールの内容が原因で友だちとけんかになった」という設定で，その解決方法を考える。
③メールを送る時に大切なことについて話し合う。

メールでは何でも気軽に言ってしまいがちだから気をつけないといけないね。

メールは相手の気持ちを考えて送ることが大切なんだね。

メールのよい点と，そのメールが原因でけんかになった事例を照らし合わせながら考えることで，「何でも言いやすい」や「気軽に送ることができる」などのメールの長所ばかりに目を向けるのではなく，「メールで伝えるべき内容か」や「相手を不快にさせる文章ではないか」などしっかりと相手のことを思いやることも大切であるということに気付くことができる。

見えない相手を思いやるということは，他のコミュニケーション手段であるチャットや掲示板，ブログやプロフにも当てはまる。これは，どのような手段を用いたとしても，情報を発信するときは，いつも見えないその先にいる相手のことを考えなければならないという態度を養う基盤をつくる上で，とても重要であると考える。

情報化社会の教育　中学校

実践例『かけがえのない自然環境』（理科　第２分野）

ねらい：教科の学習において，学習課題から結論に結びつけるまでの過程を，集めた資料から自分の言葉で再構成して整理し，他に発表することで，より理解を深めさせる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　3年生

本実践では，はじめに結論を予想し，インターネットや書籍や新聞から収集した情報を整理（判断・表現・処理）し，結論と課題を結びつけるように自分の考えを組み立てる（再構成）ことに力を入れた。これにより，学習内容がより深く理解できるようになることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

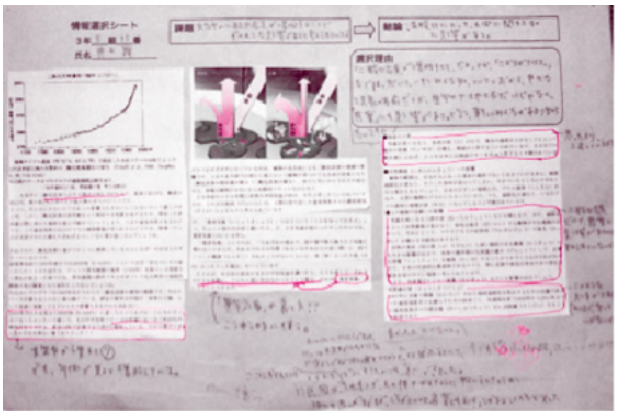
1.収集

・最初に「結論」を予想する
・書籍，新聞，インターネットでの情報収集

教科書で「調べてみよう」と子どもたちに問いかけてある内容は，その答えが教科書の中に書いてあることが多い。子どもたちは，教科書の答え部分だけを読んで「理解した」つもりになってしまう。これは，課題と結論だけを学習したにすぎないと考えた。そこで，「理解したつもり」の部分を，書籍や新聞やインターネットの情報を根拠に，自分の言葉に置き換えて発表させた。こうする事で，学習内容をより深く理解できるようになってきた。

2.選択

・集めた情報を一目で見分けられるようにはりつける
・説明に使えそうな部分にアンダーラインを引く
・アンダーラインの部分に「見出し（要約）」を書く



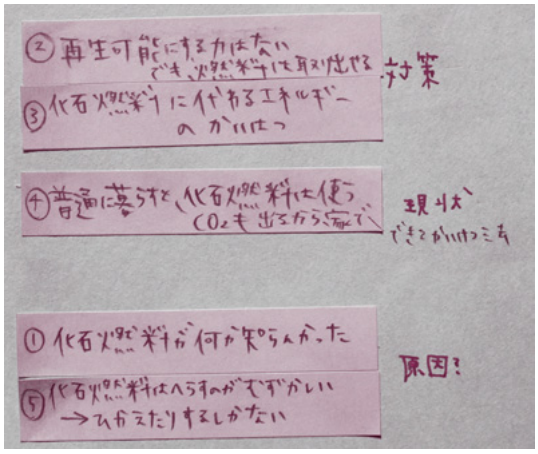
集めた情報は一度に目で見る事ができるように，画用紙などにはりつけた。「説明に使えそうな情報」には，アンダーラインや囲みをつけて目立たせるようにした。こうすることで，重複する内容や異なる立場からの意見であることがわかりやすくなった。
また，選んだ情報に簡単な見出し（要約）をつけるようにした。

3.整理

・見出しを付せん紙に書き出す
・付せん紙をKJ法により分類する
・分類されたものから，絵コンテをつくる

選択した情報をKJ法（問題解決の技法のひとつ）によって分類した。このとき，付せんを並べかえる事で，子どもたちは「現状」「原因」「対策」などの説明の要素に気付くことができた。

これらから発表用スライドをつくるために，図や表，グラフの配置を考えた絵コンテをつくった。わかりやすい説明になっているかどうかを考えておくことにより，スライド制作にすぐにとりかかることができた。



4.発表

・プレゼンテーション用スライドをつくる
・相手にわかりやすく発表する

集めた情報を使って，予想した結論を自分の言葉で，相手にわかりやすく説明できるようになったという事は，自分自身が「よくわかった」という事につながる。
さらに，相手にわかりやすい発表をするということは，今日的な課題の1つである「コミュニケーション力の育成」にかかわる問題にもなる。したがって，情報活用の実践力を活用した学習のまとめ活動は，教科の授業のみならず，総合学習や特別活動など，さまざまな場面での応用が可能である。

まとめ：情報化社会がすすむ現在，多くの家庭でコンピュータや携帯電話が普及し，子どもたちどうしの結びつきが見えにくくなってきている。また，人間関係の希薄化や，自然とふれあう体験・社会体験の不足から，子どもたちが心豊かに生活を送ることが難しくなってきている。情報メディアを主体的・批判的に活用する力を身につけさせることや，情報を正しく有効に活用したり，発信する情報に責任をもったりするなどの情報モラルを培うことが必要であることが確認された。

また，近年話題になっている情報モラル教育については，情報の対処方法としての「情報安全教育」，心の教育面からの「情報倫理教育」の2方向からのアプローチが重要である。さらに子どもたちの発達段階に応じて，小中学校が互いに連携し，体系化していくことが早急の課題である。

読書・学校図書館　小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**
・読書の楽しさを味わい，すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに，読書の習慣化や継続化をはかる。
・読書活動を通して，「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」を培っていく。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**
・自らの課題を解決するために，すすんで資料を収集・選択して活用することができるように，段階を追って系統的に利用指導を行う。
・一人ひとりの学びを大切にし，学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

実践例『めざせ！図書館名人』
ーオリエンテーション・国語辞典・読み聞かせ・ブックトークの実践よりー

ねらい：図書館のよさを感じ取り，積極的に図書館を利用しようとする気持ちを高めることができる。読み聞かせやブックトークで，たくさんの本と出会うことで，本に対する興味と関心を高めることができる。わからない言葉や日常生活における疑問を調べることで，自ら学ぶ態度や学び方を習得することができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　中学年

一人ひとりの学びを大切にし，学ぶ喜び，わかる楽しさを味わうことができるよう以下の点を工夫し，「ゆたかな学び」のポイントとした。

○　学校図書館のしくみ，分類法，配架を理解し，司書教諭や学校司書〔今年度配置〕，図書館ボランティア〔10年以上の活動実績・今年度メンバー増員〕の働きのすばらしさを知り感じることで，「図書館に行きたい」という思いをもたせた。

○　たくさんの本に出会わせることで，「楽しい」「おもしろい」と感じ，「読んでみたい」「調べてみたい」という主体性が生まれる。学校図書館を活用することで子どもの読書の幅が広がり，心豊かになるようにすすめた。

○　中学年で辞典（事典）の使い方を確実に身につけることで，高学年における自主的な「ゆたかな学び」の基礎を築くことができた。

『めざせ！図書館利用名人』
―図書館利用ノートを使って―（5～7月）

①②学校図書館で本と友だちになろう。
・図書館のルールを理解する。
・本の扱い方を理解する。
・本の借り方，返し方（今年度変更）を復習し，理解する。
・福北小の図書館マップをかく。

「司書さんに本の相談もできるなんて知らなかった。これからは相談するよ」
「コンピュータで本を探すこともできるんだ。すごい」
「あれ，本が，今までと違う場所にあるよ。どうして変えたの？」

◇学校司書，◆図書館ボランティア，◎司書教諭の動き
・毎朝の 10 分間読書
・１か月に一度の読み聞かせ

◇◆各学級に一人ずつ，毎月４日間読み聞かせをしてくださる。
◆読み聞かせの本は市立図書館から図書館ボランティアさんが団体貸し出しで借りてきてくださる。
◎◇学級の配置と担任との連絡。読み聞かせをした本（書名）と子どもの反応の記録を残す。

③④国語辞典を使ってみよう。

・国語辞典の言葉の配列について理解する。
・練習問題で理解を深める。
　活用しない清音
　活用しない濁音，半濁音
　活用しない促音，拗音
　外来語・長音符号
　用言
・日頃の生活でも辞典を使うことを確認する。

いつも横に国語辞典

「言葉って，順番に，規則正しく並んでいるんだね」
「辞書の頁の端に，言葉の住所が書いてあるんだ」
「のばす言葉は，のばす音を仮名に変えて考えるんだね」

◆図書館ボランティアさんの活動

◆手づくりの掲示

◆読み聞かせ

◆ブックコートかけ

◆蔵書整理

◇学校司書の活動

◇図書館・読書環境づくり・読み聞かせ
◇司書教諭とともに選書・授業

◇読み聞かせの反応を記録
読書傾向の把握

「金子みすゞさんはたくさんの詩を書いているんだね」
「司書さんの朗読を聞いていると，昆虫になったみたいで楽しかった」
「蒔田さんの詩はこんなに長かったんだ」

⑤ブックトークを聞こう。

・テーマ「詩っておもしろいよ」で司書教諭がブックトークを行う。
・紹介した詩を学校司書に朗読してもらう。
　『ほしとたんぽぽ』金子みすゞ
　『犬』　金子みすゞ
　『のはらうた』　工藤直子
　『教室はまちがうところだ』
　　蒔田普治

図書館オリエンテーションを実施することで，子どもは学校図書館について改めて理解することができた。この実践後，子どもは迷うことなく本を探したり，学校司書に相談したりできるようになった。また，国語辞典を日常的に使うことで，子どもは意欲的に辞典を使うようになった。今後は低学年にも広げていきたいと考える。また，ブックートークで子どもの読書の幅が広がり，長編にも挑戦する姿が見られるようになった。

読書・学校図書館　中学校

実践例『ゆたかな学び』

ねらい：図書館のよさを感じ取り，積極的に図書館を利用しようとする気持ちを高めるとともに，自分にあった本を自分のペースで読むことができる。

自分の「オススメの１冊」を紹介しあう中で，自分の意見をわかりやすく相手に伝え，相手の意見もしっかりと聞き，自分の意見と関連づけて意見交流をすることができる。

読書へのアニマシオン（国際的な読書指導のメソッド）を通して，読書の楽しさを共有することができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント

読書指導・利用指導などを通して，学校図書館が大きな役割を果たすことができるよう以下の点を工夫し「ゆたかな学び」のポイントとした。

○　読書習慣が確立していない，読書経験の少ない子どもに「読んでみたい」と思わせるような本を紹介し，自分で本を読もうとする意欲を高める学習活動をすすめた。図書館で出会った本に親しみ，積極的に読書することは基礎学力を身につけることに大きくかかわっていると考えた。

○　子どもには，図書館のよさ，司書教諭や学校司書，図書館ボランティアの働きのすばらしさを感じさせ，「図書館で本を読みたい」という思いをもたせた。学校図書館を活用するということは，将来的には公共図書館を利用し，生涯学び続ける姿勢を育てることにつながると考え，実践をすすめた。

『図書館へ行こう』（６時間完了）

①あなたの「オススメの１冊」は何ですか。

・担任の「オススメの１冊」について聞く。
・「オススメの１冊」の紹介文を書く。

まずは，先生から

②オススメの本を紹介し合おう。

・図書館クイズを通して，図書館のよさを感じる。
・グループ内で自分の「オススメの１冊」について話す。
・友だちや司書，図書館ボランティアの「オススメの１冊」の紹介を聞く。

・自分の読書経験を振り返り，自分自身の好きな本について考える。

・司書や図書館ボランティアの話を聞く。
・グループで聞き合う。

○わたしのオススメは「　　」という本です。
作者は「　　」で，出版社は「　　」です。
あらすじを紹介します。（あらすじを簡潔に言う）
次にわたしの気に入っているところを読みます。（読む）
わたしは，この本を読んで「　　」と思いました。ぜひ，読んでみてください。

・互いの発表を聞いて，意見交換をする。

「わたしもその本，読んだことがある。わたしはこの場面が好きだった」
「ぼくはその本は読んだことがないけれど，別の本を読んだことがある。テーマがとてもおもしろかった」
「学校司書さんの紹介してくれた本をぜひ，読んでみたい」

・互いに意見を伝え合う。
・自分の読書経験や考えと比較し，関連づけて意見交流させる。

学校司書さん・図書館ボランティアさん

・授業を振り返り，感想を書く。

○わたしの発表した本を読んでみたいと言われてすごく，うれしかった。
○自分では選ばないような本の話が聞けてとても興味深かった。読んでみたいと思う。

③④紹介された本を読もう。
・図書館の本から好きな本を選ぶ。
・自分なりの読書目標を決め，読書を始める。
・朝の読書の時間も活用して読みすすめる。

⑤⑥図書館の本でアニマシオンを楽しもう。
・『一茶百句俳句カルタ』を用いて，俳句にふれ，想像力をふくらませて俳句の一節を考える。
・『あらしのよるに』を用いて，集中して聞き，あとに示す文章と原文との違いに気付く。
・『100万回いきたねこ』を用いてみんなで話し合って問題を解決する。

・自分にあった本，「オススメの本」を図書館から選ぶ。
・読書の記録をつける。

・同じ本を読むことを通して読書の楽しさを共有する。

○みんな，すごい。おもしろい俳句ができていた。現代版，一茶がたくさんいた。
○クイズや話し合いをしてみて，もう一度，じっくり読んでみたいと思った。

この学習が，「読書の楽しさを感じ取り，自分にあった本を選び，自分のペースで読むことができる子ども」を育成することの一助になったと思う。

生涯学習の場として図書館を活用することができるように，学校図書館を身近な場所と考え，積極的に利用できる子どもを育てることが重要であると考える。

総合学習

小学校

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　**「基礎・基本」について**

総合学習は，各教科での学習を生かし，生活に結びつけながら子どもの主体的な活動を支援し，子ども自らが「学び方を学ぶ」，新しい「学びのあり方」を求めていく学習である。そこで，基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は，教科で行うことを前提とし，総合学習では，体験的な学習や探求的な学習を通して，「よりよく問題を解決する資質や能力，自己の生き方を考えることができる力」を身につけさせていきたい。

○　**「生きる力」を伸ばすための重点**

変化の激しい社会を担う子どもに必要な力のひとつである「基礎・基本を身につけ，いかに社会が変化しようと，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」を身につける上で，総合学習の果たす役割は大きい。そこで，子どもの学ぶ意義や目的意識を明確にするために，日常生活における課題を発見し，解決しようとするなど，実社会や実生活とのかかわりに重点を置きながら学習をすすめていく。

実践例『世界の食文化にふれよう』

ねらい：世界の食べ物を調べる活動を通して，それぞれの国や地域の食べ物が，そこで生活する人々の生活習慣や気候などに大きくかかわっていることに気付くことができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント　高学年

小学校５年生において，カレーづくりを通して，自ら課題を見つけ，自ら学び，学んだことを自らの生活と結びつけて考える学習活動をすすめていった。

総合学習として，食育と関連させ，情報・国際理解などの横断的・総合的な課題を取り入れることで，自分と社会や日常生活とのかかわりを重視することを「ゆたかな学び」のポイントとした。

野外学習でカレーをつくろう
（１～６時）

①野外学習でカレーをつくる。
②各家庭のカレーのつくり方を調べる。
　・材料を調べる。
　・調理方法を調べる。
③調べてわかったことを発表し合う。
④カレーに関する課題を発見する。

家のカレーと違うなあ…。みんなの家はどうなのかな？

普段，各家庭や学校給食で食べる機会が多いカレーについてくわしく調べることで，「本物のカレーは一体どのようなものなのか？」「カレーがつくられたのはどこの国なのか？」といった課題を発見することができる。

本物のカレーをつくってみよう（7～13時）

①ゲストティーチャーを招いて，インドのカレーづくりを行う。
②カレーに関する課題を解決するためにゲストティーチャーに質問をする。
③わかったことをまとめる。

たくさんのスパイスと野菜でカレーができたよ！

すごく辛い！家のカレーとぜんぜん違うね。

子どもたちは，カレーづくりを通して，「本物のカレーは水は使わず，野菜の水分とスパイスでつくる」「宗教上の理由から，使う肉の種類は決まっている」など，各家庭でのカレーのつくり方とはまったく違うことに気付くことができる。また，ゲストティーチャーからは「スパイスには食欲増進作用があって熱いインドにはなくてはならないものである」「カレーはスプーンを使わずに手で食べる」などといった，食生活に関する話を聞くことができる。

世界の食べ物を調べてみよう（14～18時）

①関心をもった食べ物について調べる。
②わかったことをまとめる。
③調べてわかったことを発表し合う。

韓国はインドとは反対に寒いけど，体を温める作用のある辛いものをよく食べるんだね。

ヨーロッパはお米より小麦がたくさん取れるから，ごはんじゃなくて，パンやパスタなんだね。

世界の食べ物を調べる活動を通して，それぞれの国や地域の食べ物が，そこで生活する人々の生活習慣や文化や気候などに大きくかかわっていることに気付くことができる。このことは，他者を理解し，尊重しながら生活していこうという態度を育てる基盤をつくる上で重要であると考える。

総合学習

中学校

実践例『福祉実践講座・福祉体験教室』

ねらい：体に障害のある人々に対し，共感的な理解ができるようにするとともに，思いやりのある接し方が自分からできるようにして，共生・共存について自分なりの考えをもつことができる。

実践例における「ゆたかな学び」のポイント

福祉ということばの意味や，具体的なボランティアの方法について，どんな方法があり，どんなことならできるのか，知ったり知識を共有したりする。

これらのことを実際に福祉施設に出かけていって実践することで，学んだことが正しかったのか，支えられる人々の生の声を直接聞いたり，それぞれの施設で学んできたことを伝え合ったりすることを「ゆたかな学び」のポイントとした。

福祉について知ろう
（1～4時）

①身近にある福祉について知る。
②福祉実践教室で開かれる講座を知り，受講講座を選択する。

どんな講座が開かれるのかな。

福祉ということばに漠然としたイメージしかもっていなかった子どもが，具体的な方法を知り，できるようになりたいという意欲をもつことができる。

福祉についてふれよう
（5～6時）

ボランティアの人々をゲストティーチャーとして招き，実際の内容を体験する。
（要約筆記・点字・手話・盲人ヘルプガイド・車いす体験・車いす講話の6講座）

盲人ガイドヘルプって，話すのが早くて，書くのが追いつかなかった。

車いすって，ちょっとの段差でも自分一人では乗り越えられない。道の傾きでまっすぐすすむことも難しいんだ。

ボランティアの方法を実際に体験してみることで，予想もしていなかった難しさを味わうことができる。また，恐怖心を与えないようにするなど，相手の気持ちになって支えていくことが大切だと感じることができる。

感じたことを伝え合おう（7～8時）

①体験してきた講座についての活動内容と感想を話し合う。
②友だちの発表を聞いて感想を発表し合い，福祉体験教室ではどんな施設に行ってみたいか考える。

事故から立ち直って，元気に過ごしているなんてすごい！

体験していない講座の内容について，情報・感想をシェアリングする。このことにより，自分の学んだ内容だと，どんな種類の福祉施設へ行くのが効果的か判断することができる。

福祉について深く学ぼう（9～26時）

①行き先を選択する。
②行く方法を調べる。
③交流会の内容を決めて，出し物の練習をする。
④福祉実践教室に参加する。
⑤礼状を書いたり，新聞をつくったりする。
⑥新聞を読み合い，感想を言う。

デイサービスセンターのお年寄りは明るくて話しやすい人が多かったよ。

生まれながらに体に障害のある人のことを最初は少しこわいと思ったけど，自分たちと同じで，自分のすることを一生懸命やっていたよ。

施設で実際に活動することで，口で言うほどボランティアは楽ではないことを体験することができる。その中で，普通の人と同様にやさしく接することが大切であることや，体に障害のある人たちもわたくしたちと同じ一人の人間であり，努力し，助け合って生きていることを感じることができる。